
斑裂きと捕護滑動

紫駄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斑裂きと捕護滑動

【Zコード】

Z5714M

【作者名】

紫駄

【あらすじ】

『天才は”発狂”か”絶望”によつて、新たに生まれるの』

そう論じた天才的な犯罪者は、年端もいかない”少女”。

『それは”滑動”。俺自身の”動機”など、僅かにも関係しない』

そう吐き捨てた”刑事”は、己を理解しないまま、強い信念のみ

で少年犯罪者を取り締まる。

両者は出会い、競い、因縁を深めるほどに、互いを理解し認め合う。そんな中、人外の能力を持つ”犯罪組織”が行動を起こす。”天才”と”刑事”は……。

警察物に見せかけた半分ファンタジーです。感想いただけだと嬉しいです。

Prologue 同志信仰（前書き）

誤字、脱字あつたらごめんなさい。

現實の組織、団体、事実とは一切関係ありません。

良作とも一切関係ありません。

これは、彼がまだ刑事になりたての時の話らしい。

甲高いブレー キ音。爆走するトラックとパトカー。

『止まりなさい！ 無駄な抵抗は止めなさい！』

スピーカーから発せられる声など聴こえないかのよう、その怪しいトラックは走り続けていた。

「くそッ、民間人までまきこみやがって……！」
助手席に座る警察官が、一般車をギリギリで避けて走るトラックを睨みつけた。

「なあ、おかしく、はッ、ないか！」

ドライブテクを駆使しながら、運転手の警察官も叫ぶ。

「何がだ！？」

「逃げ方が派手過ぎる！」

「はあ！？」

「『物』が『物』だ、人目に付くのは奴らもさけたいはずだ！ 壁の爆破といい、まるで俺達を誘導してるように……」

「だ、だけど」

言い淀んで、助手席の警察官は唇を噛んだ。

「……上司命令、だ。あのトラックを追えと……」

運転手の警察官が舌打ちをする。

「クソ……どこいったんだ、刑事は……ッ！」

ヘリが飛び、マスコミのカメラも首都高速の追跡劇を追っている
最中、ひつそりと事は運ばれていた。

どこの橋の下、人目にまったく付かない、暗い場所で。

「おい、『ブツ』はどうした」

カジュアルなワイシャツにジーンズ、それに黒ステッスルを羽織った
奇抜な恰好の男が、葉巻を吸いながら尋ねる。ブロンドの髪に碧眼、
30歳を越えない見た目だが、背負う気配は黒々としている。

「こ、こいつだよ……！」

男に答えたのは、見るからに極道のチンピラである、若い男だ。
数人のそんな男達は、肩を震わせながら、男のもとに『ブツ』を運
んだ。

筒状の、ボストンバッグ程の大きさのそれを、ゆっくりと地面に
降ろす。

「や、や、約束だぜ、”クロコ”！ か、頭は生きたまま返してく
れよ！」

「ああ……よくやつてくれたよ、アンタ等な」

”クロコ”と呼ばれた奇抜な男は、自分の後ろに待機させた車両
を振り向いた。

首都高速を走るものと、ナンバー・プレートまで似せたトラック。
その荷台には、一台の白い軽自動車が乗せられている。

「身代わり君」には悪いことしたなあ……」

「お、おいッ！ アイツの身柄も保証してくれるつて……」

「お頭さん助けるために体張つちゃつて……ククッ」

口端を二、と上げる”クロコ”に、チンピラ達は戦慄を覚えた。

「テメエ……ま、まさか……」

「いや、約束は守るさ。大事なお頭さんは返すよ。何も知らない
んだし」

と、不意に”クロコ”は、『ブツ』のそばにしゃがみ込んだ。

「にしても、ちつとも動かないな、コレ……死んでたら意味ないんだけど？」

「「」、殺すか”こんなもん”ツ！ 目覚め悪くなるだろが！」

「うん、なんでも殺すと目覚め、悪くなるよね」

”クロコ”は立ち上ると、長々しいため息をついた。

「ホンツト、目覚め悪くなるのにね」

次の瞬間、一般人の服装をした銃を持つ集団が、彼らを囲んだ。全員、明らかに一般人にはない、人殺しに慣れた空氣を背負っていた。

「て、テメエツ！ やっぱり裏切りやがった……！」

チンピラ達がおののく様を冷めた目つきで一斉する、”クロコ”に罪悪感の色はない。

「嘘は言つてないだろ？ 『頭は返す』『身代わり君の身柄は約束する』……だけど、アンタ等は知りすぎたからねえ……。フランシスカちゃん、やつちやつて？」

”クロコ”の合図で、金髪の女性が左腕を上げた。安全装置を外すおとが、橋に反響して良く響く。

チンピラ達が、何もかもを諦め膝をついた。

「……なあ、刑事の噂、知つてるか？」

助手席の警察官が不意に眩ぐが、運転手は気付かない。

「あの人は刑事になつてから一年もしてないだろ。学院から飛び級で就任してからの、あの人担当した事件、高レベルなものばかりだ……」

話ながら彼は、目の前のトラックを見つめる。

「刑事は最初の誘拐事件……犯人の罠、フェイク、次の行動まで読み取つちまつたんだつてよ」

「邪魔だ」

何もかも諦めた次の瞬間、コンクリートの壁まで投げつけられ、全てのチンピラ達は気を失う。

「ゴォン、という鈍い音が、橋に反響して良く響く。

「ん？……誰だあ、アンタ」

“クロコ”が不審げに視線をはしらせると、既に円形の部隊は“半円型”になっていた。

突然現れた、まだ幼さの残るような顔立ちの青年は、堂々とその半円の真ん中に立つ。足元にはたくさんの倒れた人間が転がる。青年は、向けられた無数の銃口に臆する様子もなく、懐から黒い手帳を出して“クロコ”に突き付けた。

「警察だ。あんまり手をかけさせるなよ、犯罪者」

「警察……？ へえ、若いね」

確かに、その短い黒髪の青年は、若すぎて警察関係者には見えない。

ただ、鬪志だけが目に見えるように感じられた。

「この場所に着いたのもだし、今どきの警察ちゃんにしては感心な熱意だよ」

「黙れ犯罪者。その足元の『物』、返してもらつ」

「これが何なのか、”上”から聞いてねえんだろ？ 単独だし、危ないぜ？ バンビーノ（少年）」

「関係あるか、カス」

警察のわりに口が悪い、と“クロコ”はつぶやいた。

「な、なんだと……」

ガードレールにぶつかり、停止したトラックを調べ、一人の警察

官は愕然とした。

荷台はもぬけの殻だ。

「オイ、コイツの様子もおかしいぞ……？」

トラックの運転手は、泣きながら運転席に丸まっている。取り調べに応じるのも難しそうだ。

続々と他の警察官や、マスコミが集まるなか、二人は目を見合わせた。

「こ、これじゃ……」

「やつぱり、刑事の……」

「どうでござあ〜〜いッ！」

と、一人の青年が一人を押しのけ、現場を見回した。

「あつ、コラ、新人ッ！」

「つてか、いたのか。平瀬」^{ヒラセ}

呆れた目の警察官達にも構わずに、平瀬と呼ばれた青年は現場を見回した。

「……すごい。すごくスゴく凄いです……ッ」

「お前、研修生だもんな。現場見るのは初めてか。まあ、俺も最初は……」

「やだなあ、刑事ですよッ！」

大きな身振りで振り返り、平瀬はキラキラした目で先輩一人を見た。

「ここの状態、刑事が想定した通りっすよね！？」

二人はハッとし、平瀬は、どこにいるのかわからない”憧れ”を思い描いた。

「カツコイイなあ……」

来島 忍（キジマ シノブ）刑事……ッ！」

「……ぐうう……ッ」

若い刑事……来島の蹴りは、確かに”クロコ”のみぞおちに入つた。

「見かけ倒しかよ、犯罪者」

「……見かけに似合わず、怖いねえ……ツアンタ……」

”クロコ”は内心驚いていた。こんな人材が警察にいたなんて、調べにはなかつた。

「警察つてより、ヤクザかヤンキーの戦い方だよな、コレ……」

「黙れ、手抜き三文役者」

「……そこまでわかるか。気に入つたよ」

”クロコ”は心底楽しそうにニヤリと笑い、呻きながらはいつくばる仲間を見る。

「オマエ等、引き上げつぞ」

「逃がすと思つかコラ

「ああ……そおらよッ」

突如、”クロコ”が足元の袋を持ち上げ……来島の頭上に投げ飛ばした。

「なッ！？」

勢いをつけて落ちてくる袋を、体を張つて抱き留め、辺りを見回す。

「逃げやがつた……か」

そこに残つたのは、空のトランクだけ。

”クロコ”達の姿は、搔き消したようにいない。

舌打ちをし、その袋を体から退かし……退かそうとした。だが、袋の中の感触に固まつたのだ。

柔らかい。

生き物……いや、人間の子供……？

「……人身売買とは、醉狂じやねえか

上からの命令、無し。

しかし、興味、有り。

来島は、袋の口に手をかけた……。

「おおい、チミ達~」

興奮した新人を押しのけ、固まる一人の警察官に声をかけたのは、恰幅のいい中年の男だった。

「あ……原 警部!~

「何故ここに?~」

原は、ハゲた額の汗を拭きつつ、へラリと笑った。

「いやね、来島に話あるんだけどね、知らない?~」

「い、いえ!~ お一人でどこかに行つてしまわれました~」

「そう? 困つたなあ……きっと、彼なりもつ奪い返しちゃつてるよね、”シモン”~

「は……指紋ですか?~」

「つうん、『ブツ』の名前だつてさ。発音ちがうでしょ。”シ”に

アクセントつくる。取り扱いが大変みたいだからね、伝えないとね~

「……あの、”シモン”とは、何なのですか?~」

片方の警察官が聞くと、原は困つた顔をした。

「聞いた話だとね、”子供”なんだつてさ、國家を揺るがすかもしれないほど、”天才”のね~

まず現れたのは、黒くて長い髪だった。子供特有のツヤはあるが、切られてはいないらしく、その小さな頭を覆い隠している。

そして、ふたつめに田についたのは、……包帯の白。

「なんだ……こいつ~

来島が、その小さな体を取り出したとき、その子の両腕は胴体にまとめられ、その両足まで完全に包帯で巻き留められていた。まるでミイラだ。

「……いや、拘束か？」

「独り言を語りつと、聞こえたのか、僅かに身じろぎをするようだ。

「……」

包帯を解くのは危険かもしれない。しかし、こんな小さな子供に

。

そんな葛藤をしていると、ぱたりとした瞳と皿があつた。

「……よお、無事か」

「……？」

ひょこっと幼く首を傾げる仕種を見て、迷いは消えた。

包帯を解いていく。

下は、11月にはそぐわない薄手で藍色のワンピース。全体的に、異常に細い。女の子だ。

「……なんか喋れよ」

「……」

「いくつだ？」

「……れ

「ああ？」

少女は、何の感情も込めずに、来島を見つめている。

「だれ」

「俺か？ 来島 忍。刑事だ。お前を奪還して来た」

「けいじ？ だつかん？」

「難しいか？ ようはお前を家に返す……」

「いや」

少女は急に叫ぶように言い、来島の腕を振り払った。しかし、その反動でフラフワと座り込んでしまつ。

「おい……」

来島が再び手を伸ばさうとするが、携帯がなつた。

「チツ……来島です」

『あ、舌打ち。来島？ 原だけど、"シモン"見つけた？』

『"ブツ"なら確保しました。……"シモン"てコイツの名前です

か?』

『うん』

「人間なら先に言いいやがつてくださいよ」

『相変わらず口悪いなあ。あとね、ソレひとつと頼める?』

『くらいわ、公園とか喫茶店かなんかで』

『…………は?』

『経費から落としていいゾ』

『殺されたいかオッサン…………すみません』

『うん、聞かなかつたことにするから、頼めるよね?』

『…………は?』

『はい、じゃ~ね』

ブツン、ツーツーツー……。

携帯をしまいながら、「ガキ苦手だつてのに……」と、俯いたままの少女”シモン”に田をやる来島だった。

かくして少女は始動シドウし、青年は滑動カジドウするための坂をのぼりはじめた。

episode 1 滑動動機・上（前書き）

誤字、脱字あつたら「」みんなさい。

現実の組織、団体、事実とは一切関係ありません。
良作とも一切関係ありません。

episode 1 滑動動機・上

夕暮れ、薄暗がりの中を小柄な少年が走っていた。両手に必死に抱えたポリタンクからは水音。制服姿の彼の顔は蒼白で、見開いた目は絶えずあたりを見回している。

「…………」

あたりに人がいないことを確認すると、さらに暗い路地裏に入り込み、そこに詰まれた雑誌と新聞の山を見下ろした。

「ここまでくれば、少年が何をしようとしているかは察せられるだらう。」

しばらくすると、少年は緊張した顔でライターを取り出した。荒い息に吹かれて揺らめく、赤い火。

「…………おー」

少年は弾かれたように走り出す。

「あつ、コラ待て、クソガキ…………！」

「なんで、なんでバレた！？
今回で最後なのに！！
今だけ上手くいけば…………！」

「うううおああああいッ！？」

俯きながら必死で逃げた先から、奇声があがつた。

「さやあつ！」

少年も思わず叫ぶが、スピードは急には下がらない。
思いつきりその人影に突つ込み、もろとも地面に転がる。
「ボケつとするな、確保しろ！」

「は、はいい」

慌てる人影に捕まえられ、少年は必死の形相で暴れ回る。
捕まつたら死ぬ、それくらいの勢いだ。

「離せよッ！ 離せつてばッ！！」

「い、痛い痛い！ ちよつ、爪痛い！ 暴れないと痛い！」

「離せえーーッ！—」

「噛み付かないでーーーッ！—」

捕まえた方が泣きそうだ。

しかし、拘束の腕は弱まらず、最初に声をかけてきた男が暗闇からフードインしてきた。

くすんだ藍色のスーツの前を開き、白いシャツに背景に溶け込む黒いスラックス、オールバックの長身。

その眼光の鋭さに、少年は身が凍る。

「警察だ」

その男が静かに告げると、少年は体中の力を抜いた。

終わりを、自分の負けを悟ったのだ。

そのまま泣き出す少年を、捕まえていた男が心配そうに覗き込む。

終わった。

このまま僕は
連れていかれて

”妹”は……！

「心配するな、自分のこと以外はな」

男は心底嫌そうに少年を見下ろし、吐き捨てるようなつぶやいた。

「お前もクソガキだが、アイツ等も相当クソガキだ。だが、”牧川美幸”のマークはもう外れたと思え」妹のフルネームに少年が目を上げると、男はうんざりだというふうに溜息をついていた。

甲高いパトカーのサイレンが聞こえる。

赤いランプの光が、断続的に路地裏に差し込んだ。

雑音が聞こえる。

『これは人間じゃない』『余分なことをしない方が身のためだ』『諦める』『残念だつたな、ルーキー』『問題は歳じゃないんだよ』

『これは私のものだ』

『さよなら』

俺は、雑音に問う。

何故、助けなかつた。

罪は、何から派生する。

『なあ、なんでお前ほどの奴が現場にいるんだ？　とつくに人の上にたつてもいい功績だろうに』

現場じゃねえと意味がないからだ。
動き続けなければ生きられない。

『何故、そこまで”子供”にこだわるんですか？　刑事』

俺にもわからない。

『刑事』

わからない。
知るかそんなこと。

『刑事?』

五月蠅い。

考えさせるな。

「刑事? 朝ですよ~?」

「…………」
「やつと起きた! いやあ~、死んじゃつたのかと思つてびつくり
しました! あ、徹夜続きだつたですもんね~」

「…………」
「みんな、目が点になつてましたよ! あの子なんてノーマーク
でしたから! さすが刑事! 最高ですッ! かつこいいです!」

「………… 声でかい。五月蠅い」

「えつ、ちょつ、怒らせちゃいましたか!? ごめんなさいごめん
なさい、寝起きの刑事の目つき怖いです! 人殺せそうてか今死
にそう! ただでさえも人相悪いのに睨まないでくだ……へぶつ」
机に顔面を叩き付けてやつて、ようやく後輩の平瀬は静かになつ
た。

俺の眠りを妨げた報いだ。
ざまあみろ。

episode 1 滑動動機・上(後書き)

もしよければ、各話の名前の意味も考えてみてください。
「」感想、「」意見など、心からお待ちしております。

身体を起こし、ガシガシと髪を搔き乱してから辺りを見渡す。
職場……警察局の執務用デスクに突つ伏して寝ていたらしい。書きかけの報告書がまとめてある。

まとめてある、ということは、つい俺はうたた寝したのではなく、真剣に寝ようとして寝たということだろう。

我ながら堂々たるサボリじゃないか。

「刑事……、降参ですから放してください……」

気のせいいか？机に押し付けた球体から、情けない声が聞こえる気がする。

「刑事い……」

「…………わかつたから、気持ち悪い声出すな」
腕を放すと、五月蠅い後輩がバネのように跳ね上がる。

「痛がつたです！ 刑事！」

わざわざ敬礼つきで報告しやがった。

「その報告はいらねえ……次」

「はえ？」

「クソガキ共の処遇について調べて来いつづたはずだろが」「は、はいっ」

慌てて鞄を探る後輩。

「あ、あつたあつた。今回ぼく達……いえ、刑事が補導した”安達佑真”被告人を初めとする高校生グループは”放火”、“脅迫”、“障害”などの容疑があり、言い逃れできない状況です」「…………」

「でも、中学生の”牧川 健太郎”被告人ですが、”未成年であること”と、”死者が出なかつたこと”、“脅迫されること”だつてことが考慮されたので、重罪にはならないです。よかつたですね

！」

「……いいわけあるか。そいつはすでに”放火魔”で、未遂でも犯罪者は犯罪者だ」

俺が言うと、そいつは首を傾げる。

「刑事、こんなに”未成年犯罪”にこだわるのに……子供嫌いだつたりします？」

「嫌いだから引っ立てる程、俺はガキに見えるか？」

「むしろ、少し老けて見えます……い、言い間違えですッ！ 淡くてカツコイイです！ 瞥まないでくださいッ！」

「褒めろとも言ってない」

「……じゃあ、なんですか？」

俺は後輩から田を離すと、4年間で節張つた己の手の甲を見つめて、吐き出す。

「”殺させないため”、ただそのために動いてきた」

21

”働い”たのではない、”動い”た。
俺は、”人”らしい目的を持たず、ただひたすらに”動い”ている。

何がしたくて警察になんかなつたのかも忘れて、4年間、刑事に就任したてのころに俺に起きた”変動”から、ひたすら。

『純粹無垢ゆえ、タチが悪い。

子供は人を殺せるだろうが』

違う。俺達が、
大人が殺させるのだ。

だから、殺させない。

「ヤーじまちょん」

ぽん、と、冷たい何かを脳天に置かれた。声と呼び方で誰だかわかる。

振り返る氣力も起きないほどのざつする奴だ。

「あつ、原^{ハラ}昭孝^{アキタカ}警部！」

「……何か用入か」

置かれた缶コーヒーを軸に、ぐるっと首だけ回して背後を見遣る。でっぷりした腹を揺らして、俺に唯一かまう上司が笑っていた。

「睨まないのー。来島ちゃんは見た田ヤーさん（ヤクザ）なんだか

ら

「余計なお世話だ……です」

「他の偉い人達からは印象悪いよー？ その田つき」

「いい歳してそのふざけた喋り方する奴に言われたくなかったく

ないですよ」

「言い直してもトゲが抜けないんだけど。セリフからも僕のハートからも」

と、脂汗を拭きながら、原警部は苦笑した。そして、俺のデスクにひとまとめの紙を置いた。

「新しいお仕事、だよ」

俺は頭上のコーヒーを掴み取りながら、書類を一枚めぐる。

取り調べ。しかも、やはり未成年。

「さつきの仕事が終わつたばっかで悪いけど、僕等も手をやいでるんだよねー、これが。助けて来島ちゃん」

自然と溜息が出た。

「ヨイツは変わらない。4年前から、腹の出方も生え際も、俺にす

ぐ頼るところも、人使いが荒いところも。
そのおかげで動きやすいが。

「了解」

「一言だけ返すと、俺は立ち上がりつた。
とにかく、まずは、動く。」

「ゴメンネー」とかのたまう上司を置いて、俺は書類に記され
た取り調べ室へ向かつた。

「け、刑事！ 待つてくださいよ～！」

少し行った通路で振り返ると、後輩が息を切らして追いついてき
た。

「あ、歩くの、早過ぎ、ます、て……ちよつとだけ、よみ見した
ら、もういらないなんて、びっくりですよ……」

「……ついて来るのかよ」

取り調べにそう人数はいらない。前任者もまだ溜まってるはずだ。
しかし。

「当たり前です！ ぼくは、来島刑事の行くところ、どこまでもつ
いて行きますからね！」

ソイツは何故か胸を張り、俺の横まで来て大声で言つた。

「……ストーカー容疑で職務質問」

「ひ、酷いッ！」

原警部が”変わらない奴”だとして、ソイツは相当に”変わった
奴”だ。4年間から、やたらと付き纏つてくる。

俺と居ても、功績が積み上がったところので、出世はしないだろう
に。

「……しゃあねえな。行くぞ、後輩」

「うわあ！ さらに酷いじゃないですか、刑事！」

後輩が突然、大声を上げた。

「何だ」

「後輩」……つて、せめて苗字で呼んでくださいよ……。

”平瀬

哉”ですつて、何度も名乗ってるじゃないですか

そうだった……か？

そういえば、たまに呼び方が無意識に元に戻る。気づかなかつた

な。

「……行くぞ、平瀬」

「はいっ！」

後輩……平瀬は、何故か嬉しそうについで来る。

「……気持ち悪い」

「ひ、酷いっ！」

それは”滑動”。
自身の”動機”など関係しない。

episode 1 滑動動機・下(後書き)

「J感想、「J意見など、心からお待ちしております。」

episode 2 放童事故（ホウドウジイ）

某年、6月20日。

『犯罪者』が世間に出現した。

俺は、「『めんなさい』」「もつしません」「ゆるしてください」と連呼する痴漢容疑のオッサンが残る交番を出た。

たまたま現場の電車に乗り合わせたので、その場で腕をひねり上げた。

交番に連れていけば容疑を否認しやがったので、真っ正面に座つ

だ。

何故だ。

「刑事の田つきが怖かったからですよ……ぼくも怖かったです。交番の駐在さんまで顔が引き攣つてました……」

普通のようについて来た平瀬がつぶやく。俺自身、睨んだつもりはない。ただ、しかたなくその場で”尋問”でも始めようかと思つただけだ。

試しに、「刑事、足早いですって」とか「休憩しましょうよ」とか五月蠅い平瀬を、意識して睨んでみた。平瀬はとたんに真っ青になつて黙る。

不本意だが、黙らせるのに便利かもな。

とある凶悪事件の、田撃者である12歳の少年、”明石宗太郎”の搜索。そのために俺と平瀬は、少年が保護されていたという交番付近を歩き回ることになつた。

その交番に、痴漢野郎を突き出した訳だが。

原さん曰く、「来島は子供ばかり追いかけてるから、行動パタ
ーン読めるんじゃないの?」と、俺に担当をまわしたらしい。

冗談じやない。俺が先を読めるのは”犯罪者”の行動くらいだ。

特別にガキを捕まえるスキルがあるわけじやない。

「刑事いーーーどこにむかってるんですかーーー?」

「…………」

でも、まあ、難しいことでもない。

「じみ箱の中を覗きこんでいる（いるわけないだろ）。」平瀬の襟
首を掴んで、引きずつたまま歩いていく。

「け、じ、く、苦し……」

「すぐ近くだ。我慢しろ」

「だ、だ、だからどちらへ……」

「アヤサキ綾崎児童公園」

かくして、明石少年はいた。

「みいーつけた！」

平瀬が笑顔で、ドーム状の遊具の中に手を伸ばしていくのを、少
し離れたベンチに腰掛けて眺める。

犯罪者でもないガキに対し、俺が自ら行くのは、あまりにガキが
不憫だ。睨まなくとも、人相が悪い自覚はある。

「心配しましたよ！怖かつたですねーーーもう大丈夫ですからーーー
その点、緊張感のない雰囲気を持ち、無害さをかもしだしている
平瀬。俺よりは”説得”に向いている。

しばらくして、遊具から平瀬の手を握り、明石 宗太郎が出てき
た。なるほど、Tシャツに半ズボン、情報通りだ。顔色がすごぶる
悪いが、怪我はない。

俺が立ち上ると、明石少年は怯えたように足をすくませた。目

が潤んできた……マズい。

やはり、大声で泣きだした。

「あわわ……大丈夫ですよ、お兄さんの先輩です！　田は怖いけど、いい人ですかー！」

余計なお世話だ。

「ほん……とう？」

「ええ、正義の味方です！」

誰がだ。そう言つて殴り飛ばしたいが、ガキが泣き止んだのをこには抑えよう。

単独で”滑動”出来ない理由は、じつじつにある。

その後、俺と平瀬は無事少年を交番に届け、原さんに報告の電話をした。仕事は一先ず終了だ。

平瀬と少年はいつの間にか仲がよくなつたらしく、平瀬に手を振る少年はひどく不安そうだった。

不安の原因は、平瀬との別れだけじゃないかも知れないが。

昼前だつたので、適當な喫茶店で昼食をとることにした。男一人というムサイ組み合わせも、昼休みのサラリーマン共に混ざれば違和感はない。

「刑事、あまり聞いていなかつたのですが……宗太郎くんはどんな凶悪事件の目撃者なのですか？　すごく怯えていたのですけども……」

…

「”宗太郎”……？」

「も、もう忘れたんですか！？　わざと保護した男の子ですよ！」

「ああ……」

済んだ事件のこととなると、印象が薄ければすぐに忘れてしまつ。

明石　宗太郎。

「『強盗殺人事件』だつたか」

「えつ……」

「『襲われたのは午前7時のコンビニ。客は、塾へ向かう途中の明石少年しかおらず、犯人は店員を刃物で刺殺。レジ」とバイクに乗せ逃走した』」

報告書の内容、そのままだ。

「あいつは棚の裏に隠れていたらしい。人が一人殺され、犯人がバイクで逃げ去るところを見た唯一の目撃者だ」

「……ショックだつただろうなあ。かわいそうに」と、平瀬は首を傾げる。

「なら、なんで逃げだしたんでしょう。警察にいた方が安全なのに……」

「あの交番の前に、暴走族のものらしいバイクが複数置いてあつた」派手に赤いペンキをかけたような、ふざけたデザイン。爆音を伴う機動音。

見たばかりの血飛沫と、逃げ去つた犯人のバイク音に重なつたのではないか。

「混乱してたんだよ。まあ、即座に180番できたのは、あの歳にすれば上出来だろう」

「……なんだか、かわいそうですね。そんな混乱した状態で、取り調べを受けるなんて。怖いお兄さんにかこまれて……」

「保護者もつくからいいだろうが……」怖いお兄さんにはならねえように、一人、呼んでおいた

「え？」

「同期の刑事だ。ガキみたいで変人だが、自分より弱い奴には人当たりがいい。……弱い奴ならな」

見れば、平瀬はポカンと口を開けていた。無理もない。普通はそうだ。

だが、実在する。

少なくとも2人、俺のまわりには、そういう変人の刑事がいる。しかも、2人そろって俺に絡んでくる。

「け、刑事、もう、そんなところまで推理して……」

「ただの”予想”だ。こんなも

「すごいッ！……」

俺の言葉を遮り、平瀬は突然立ち上がって叫んだ。

一斉に注がれる店内の視線。

「おい」

「すごいですよ！ 彼を見つけたのだって、理由がわかつたのだって、彼のために適材適所な人材を呼んじゃうのだって」

「静かにし

「迅速に的確に無駄なくミスなく、何だってこなしちゃうだなんて、流石ですッ！ 惣れ直しましたよーー！」

「キモい。うるさい

「他の誰が刑事のこと悪く言つたって、ぼくは刑事にツグベネクタイを下に引いて黙らせた。平瀬はむせたのか、苦しそうに

席に座る。

ざまあみろ。

平瀬は、俺と組んだときから、いちいちくだらない」とまで騒ぎ立てる。何がそんなに楽しいんだか、俺には理解できない。これが無ければ、ただの”役に立つ後輩”なんだがな。

会計を済ませようと、席を立つたときだった。天井から吊されたテレビから、ひときわ気を引く音楽が飛び出した。

新人らしい男性アナウンサーに、数枚の紙が素早く手渡される。緊急速報……か？

『えー、臨時ニュースです。昨夜、大手”玄庭グループ”の株式が、何者かによってハッキングされ、大損害を巻き起こした事件に……』

”クロニワ”？

4年前から、脳裏に焼き付いて離れないその響きに、俺は思わず足を止める。

「刑事」？

先を歩いていた平瀬の不思議そうな声は無視し、画面を凝視した。

『……ただいま、この事件についての速報が入りました。ハッキングをしけ

た”犯罪者”が、さらに数日前”玄庭グループ”から大事な大事なたあいせつなモノを盗んでいたことが判明しました』

「…………」

気持ちの悪い違和感。

何だ今の喋り方。

しかも、何故”犯人”じゃなく、”犯罪者”なんだ？

『ここ数年の”玄庭グループ”のすんばらしい成長は、盗まれたモノによつてもたらされたらしいです。

と、『こことは』

『画面に、全面ガラス張りのビルが現れる。その特徴的な流線型のデザインは、知る人ぞ知る”玄庭グループ”本社ビル。ビルの写真を手で指し示しながら、若いアナウンサーは不自然にニッコリと笑つた。

『すでに、この箱庭はなああんにもできない、ガラクタということですね』

ガラスのビルの写真は、その一言で、握り潰した紙のようにクシヤリと歪む。随分とよくできたアニメーションだ。周りの奴らが息を呑むのもわかる。

あからさまな悪意が伝わつてくる。

『なんでも、じつは2回にわたるこの過去の事件、”玄庭グループ”は2回とも”犯罪者”からの予告状があつたらしいんです。警察には届いてないんですけどね』

「け、刑事……このアナウンサー、最初のほう、右頬に黒子があつたと思うのですが……」

平瀬の言葉にうなずいて見せた。意外によく見ている。

「手の込んだ放送ジャックだ。繫ぎ目が見えなかつただろ。しかし……」

目的が読めない。

『3通目の予告状はすでに届けられたのですが、”御老人”にばか

り責任がかかる状況は、あまりに不憫だと感じます。せつかく”正義の権力”たる警察があるのでですから』

流暢な語りを一旦止め、アナウンサーは黒子があつたはずの頬を人差し指でつき、一ヶコリ笑う。ふに、とへこんだ頬は柔らかくなめらかそうで、男のそれとは思えない。

少女のそれ、の、ようだ。

『ゲームに参加していただきまつしょおー』

警察署に帰れば、蜂の巣を突いたような騒ぎになっていた。

「刑事、原警部いましたよ！」

平瀬に促され、巨体を震わせながら走る上司を捕まえる。

「あつ、来島ちゃん、帰つてたの？いやあ、大変なことになつたねえ」

「……届いたんだな？犯行予告」

「おへ、さすがに読みが鋭いなあ。あつ、もしかしてあのニュース見たの？」

緊張感のない喋り方にいらつきつつ、うなずいて応える。

あのあと。画面はブツンと音を立てて暗転した。

テレビ自体が壊れたと思ったのか店員は慌てたが、2秒後にはCMが流れ始めた。さらにその2秒後、黒子のあるニュースキャスターがテレビ局からの謝罪をしに映る。混乱した様子はいつそ哀れだ。そのさらに2秒後、俺達も携帯で、同僚に呼び出された。

『犯罪予告。警察は喧嘩を売られたわ。アンタも来なさい、”イロ

「”イロナシ”……って、あの女性は何のことを言つてたのですか？」

「……”色がない”の”無色”と、”職がない”の”無職”をかけてるんだろ。たぶんな」

首を傾げる平瀬をテコピングで黙らせる。

俺としては、”ロリコン”の方がウザかつた。一方的に切られていなかつたら、携帯に向かつて耳を潰すつもりで怒鳴つていただろう。

デコを抑える平瀬から目を離し、俺は原警部に再び向かい合ひ。

「原さん、折り入つて頼みがある」

「ん～？珍しく素直だね。な～に？」

「”玄庭”の事件にまわせ」

「……珍しくストレートだし、頼みつていうか脅迫だよね、田つきが」

「あなたなら手もまわせるんだろ？」

「でも僕は、仕事と私情は分けてるよ？4年もたつたんだから、そろそろ思い出とバイバイしてもいいんじゃない？」

「……」

状況が読めず、おたおたとする平瀬に向かい、原警部は改めて笑いかける。

「アハッ、平瀬くん、さつきの脱走少年の報告書、来島ちゃんの代わりにちやつちやと戻してくれる？」

「はい？」

俺も平瀬も、思わず上司の顔を凝視した。

原警部は突き出た腹を撫でながら、俺達に笑いかけている。大黒のように細まつた目の奥に、愉悦が見える。滑稽だと。

「僕はこのとおり、太つ腹だから。有能で我が儘な部下の、かいにお願いシカトできないんだな~」

「…………ありがとうございます。死ね」

「辛辣なありがとうだね。ん~、それにしても」

「ここで、原警部も首を傾げる。

「今度のは”玄庭”とはいえ、”子供”は関係ないよ?いいの?君の性癖は満足するの?」

「…………別に」

思わず、深く溜め息をついた。ビリツモコツモ勘違いしてやがる。

「俺はガキ専門じゃねえ……っすよ」

警察はすでに対策本部を立ち上げていたが、犯行予告のあつた6月13日金曜日の当日早朝、”玄庭グループ”から遅すぎる通報があつた。

”玄庭グループ”社長は、38歳にして”老獴”といわれる、老けた男だ。細い黒目にやどる、狡賢く鈍い光が、油断ならない印象を与える。右足が悪いのか、杖をついている。

IT工業、機械工業、そして貿易を中心にして”玄庭グループ”を大企業へ発展させたカリスマ。
だが、その男……玄庭 クロニラ 蒼門 ソウモンは、俺の記憶の中よりもより蒼白く、疲労してみえた。

「あの時の若造か」

警備の配置のため、例のビルを訪れた俺を一瞥し、奴はそう吐き捨てた。

原さんが何か言おうとしたのを遮り、俺は、自分より低い位置からねつけるソイツの正面に立つ。

視線がぶつかる。

「盗まれた”大切なものの”……、シモンだろ」
俺の不躾な物言いが気にくわないのか、蒼門は眉をぴくりと寄せた。

「そうだ……忌ま忌ましい盗つ人共にな」

「本当に、盗まれたんだな」

「我輩が隠しているとでも言つのかッ！？」

努気をあらわにした叫び声に、後ろから平瀬の「ひいッ」という

声が聞こえた。

いや、それより”我輩”ってなんだ。

「ありえんッ！……アレは我輩の下でしか生きられん……アレは我輩のものだ……アレは盗まれたのだ……貴様ら警察ならば取り返せ」

「…………」

「なんだその目は……我輩を愚弄しているのか……アレと同じようにツ！？」

瞬間、目の裏に火花が散る。蒼門の杖の、金属製の先端が眉間に炸裂したらしい。

「け、刑事！大丈夫ですか！？ち、血が！」

血が出ているらしい。切れたのか。

「ああ、どうでもいい」

心の底から言い放つ。

「ど、どうでもって……」

「静かにしろ、平瀬」

既に、どうでもいい。怪我も。蒼門も。キレたあたりからどう

でもいい。もう情報は聞き出した。

「どうした、気が短くなつたか？……4年間で随分老けたな」

俺の見せる余裕に、蒼門は額に筋を浮かべ、しばらくして踵をかえし、歩き去つた。

『なんだその田は……我輩を愚弄しているのか……アレと回じよひみつ
にツー！』

蒼門の言葉を思い返す。

アレ……それはきっと、シモンのことなのだね。

玄庭 蒼門の娘。

玄庭の次女。

4年前、誘拐された少女。

ただならぬ天才。

アレと回じよひ元に、といひことは、そのシモンから反抗でもされたのだろう。

シモンはまだ、生きている。それを確認したかった。

「刑事ーー血止めてくださいよーー！」

平瀬に呼び止められ、ようやく血が 口に入りそうになるまで流れていることに気づく。

「ちょっと治療してきなよー。来島ちゃん、極道みたいだよ？」

メタボ上司にも言われ、現場から離れ、車に戻り治療を受けることにした。平瀬にガーゼを当てられながら、俺はまた思考に沈んでいく。

犯人は、あの時の男か。

あの”玄庭グループ”へ見せた惡意は何だ。 警察を呼び寄せた意图もわからない。

そもそも、狙われているものはなんだ？

「刑事、終わりましたよー！」

平瀬の声で我に返つた。

「スッパリ切れてました。額の血つて止まらないんですよね……持参の薬を塗つてみましたが、痛くないですか？」

「ああ、まあな」

「……えつと、あの、刑事！ 刑事が子供の事件ばかりに取り組むのって……シモンに関係があるんですか……？」

手元から平瀬に視線を移した。相変わらず情けない面だが、目には確信が宿っている。

ただの勘つて訳でもなさそうだな。

「ぼ、ぼく、4年前、刑事が”玄庭グループ”の息女を単独で救出した事件のとき、いて……せ、先輩！ 目が怖いです！」

「……なら、余計な詮索すんな、馬鹿」

「そういうわけにもいかないんです！」

睨まれて青ざめ、慌てながらも、平瀬は引こうとしない。
「救出したあの詳細は知れなかつたです。なんか、”隠されてい
る”みたいに……」

「……」

「刑事、まだ教えてくれませんか？」

「……まともに生きたければ、知るな

「そんな……むぐッ！」

叫びかけた後輩の口に、手元におかれたガーゼを突っ込んだ。

ざまあみる。

平瀬も、そして蒼門も。

「感想、意見など、心からお待ちしています。」

episode 3 片方（カタカタ）

カタカタ カタ

『こんにちわ、平瀬 哉です。ぼくの名前、なんて読むか覚えてますか？

ハジメですよ。

ぼくと来島刑事は、”玄庭グループ”本社ビルの1階、ロビーにいます。本物のシャンデリアなんて初めて見ました！ キラキラして綺麗なんですね！

犯人が狙っている”忘れもの”の正体がわからないので、ビル全体に監視を置いて、犯人が現れしだい確保します。つていうのを、さつき偉そうな人が、わざわざ難しくして喋つてました。ぼくには簡単なほうが助かるのになー（泣）

刑事は、さつきからロビーをうろうろとしている。結局、4年前のことは聞けなかつたけど、ぼくは刑事のこと信じてるし尊敬してるから大丈b』

「パソコンは仕事に使え。ブログを更新するな。殴られてえか」「も、もう殴られます……」

慌ててパソコンを閉じると、刑事は何事もなかつたかのように、また辺りを歩き回りはじめる。何をしてるのかなんて、きっと馬鹿なぼくには解らないんだろう。

ちなみに、ブログみたいに書いているけど、ただの日記です。ネットに仕事のこと流すほどは馬鹿じゃないですよ！ 情報は大事なんです。

急だつたのは依頼だけで、警察はもう準備をしていたから、すでにビル全体に監視がついてる。しかも、建物そのものがセキュリティに優れていて、網膜認識キーにレーザー網もあるし、監視カメラに死角もないらしい。

そういえば、なんで監視カメラって、見つけるとピースしたくなれるのかな？

あつ、シャンデリアに隠れてるのみつけ。ピース。……まわりの人達に白い目で見られた。うう。

こんなに警戒されてて、犯人は入ってくる気になるのかな？
というか、自分から「盗みに行くよー」なんて自分から教えなきゃいいのに……。

もしかしたら、刑事は犯人の意図も全てわかつているかもしれない。

4年前のあの事件だつて
あつと
まに

。

「平瀬」

「えはいッ、刑事！」

急に来島刑事に呼ばれ、ふかふかのソファーのせいで飛びかけた意識を、慌てて掴みとった。

刑事は呆れた顔で、僕の正面に立っている。

「お、おはよー」「やれいますッ！」

「もう昼だ。むしろ遅えよ。何寝てんだ」

「い、いえ！ 刑事に初めてお会いした時の夢を……」

「キモい夢見るな」

「すぱつ、と言い放ち、刑事は「アーペン」でぼくの頭を弾いた。実はコレ、かなり痛い。

「……お前はここにいても邪魔なだけだ。抜けてろ」痛くて抱え込んだ頭に、刑事の低い声が入り込む。

「そ、……そんなんっ！」

勢いよく頭を上げた。

額も痛いけど、刑事に失望される方がぼくには痛い。

「た、た、確かに今ちょっと眠かったです、ごめんなさいっ！ でも、ちゃんと指示が来たら……」

「静かにしろ。指示は期待するな」

刑事が指した親指の先を見ると、今回の司令官でもある鷹鮑警視タカハヤが、ふんぞり返って部下に指示を出してくる。

「アレは使えねえ。考えが若すぎる」

「鷹鮑警視、ですか？」

若いって……年歳は、刑事とあまり変わらないはずだけど。

「目立つ事件だ。次の署長候補の一人だしな……手柄にしたくて堪らないんだろうよ」

確かに、鷹鮑警視の出世欲の強さは、よく彼の部下から噂で流れてくる。

「えっと、でも、ビルには死角がないように警察官が配備されてますし、セキュリティも完璧つて……」

「確かにビルのセキュリティは完璧だが、所詮ただのプログラムで動いている。情報さえ漏れれば、侵入はたやすい」

「で、でも、そんなに簡単に知られるなんてないんじや……」

「”思いがけず情報を知っているからこそ、犯行予告をした意味がある”」

思わず息を呑む。

それなら、ぼくが寝る前に考えていた”疑問”の答えにもなる。

「……そつか、なにか”有利になるもの”が無いのなら、予告なく侵入したほうが成功するはずですね」

「ああ。だが、奴……鷹鮑は、たかが刑事の俺が進言したといひで動かないだろ?」

そういうえば、鷹鮑警視は部下からのアドバイスを聞かない」とでも有名だ。実績もあるし、プライドが高いんだらうけど。

「……だからこゝで、やつてもらひうつことがある」

「へ?」

「比較的お前の方が自由に動ける。」ヒを出で、コイシに書いてあることをやつておけ……その方が有益だ」

手渡された紙は、手帳を破いたものだらうか。

書いてあることを読んで、……理解できなくて、思わず2回読む。

「刑事……これは?」

「せいぜい俺なりにやらせてもらひう。……頼むぞ」
ふつ、と。

刑事は珍しく、薄く笑った。

カツコイイ……!

「はいッ、刑事!……いつてきますッ!……」

ぼくは、勢いよくドアへ駆け出した。

刑事の期待に応えたい!……その一心だ。

「あつ、なあ平瀬

ドアを抜けたところで、先輩の警察官に呼び止められた。

「何ですか?……今急いでるんです!」

勢いのまま行つてしまおうとするのを、身体で遮られてしまつ。

自分より体格のいい先輩を跳ね飛ばすだけの勢いは、流石にない。

ひょろひょろした自分の体格は、ちょっとコンプレックスだったりする。

「もー、何ですか！？」

「いや、お前さ、来島刑事とよく一緒にいるだらう？」

「え？ ハイ」

「さつき、すゞしく怖い顔してたからさ……刑事の機嫌どうだった？」
おそるおそる、ちらちらとロビーの扉をうかがう先輩を見て、なんだか不思議な気持ちになる。刑事は確かに厳しいけど、怖い人ではないのに。

「さつきお会いしたときは良さうでしたよ。笑つてたし」

「笑つてたあ！？ アレで！？」

ものすごい驚かれた。

「わ、笑つてましたよ？」アレは

おつかなびつくり言えば、先輩は、ぼくの顔をまじまじと見て、あごに手をやる。

「お前、実はすごい奴かもな」

「な、何がですか？」

「普通、あの人の”笑い”とか”呆れ”とか”怒り”とか、全部同じ仮面に見えるだろ？」

そうなんだろうか。

「ま、付き合いが長いってことだよな。がんばれよ」
ぼくの肩をぽんつ、と叩き、先輩はロビーに入つていった。

なんか……褒められた？

力タカタ 力タカタ

力タカタカタ

キーボードを叩く軽快な音。

力タカタカタ

力タカタカタカタ

力タカタカタカタカタ
力タカタカタカタカタ

だんだん速くなつてゆく、細く白い指の動きを、両膝を抱えるようすわり、サングラスをかけた少年が見守つていた。

針金のように細い身体を、6月だというのに、灰色で分厚い長袖のパークーで包んでいる。黒い短パンと小柄さ以外、彼を少年らしく見せるものはない。

暗い室内ではむしろ視界が悪くなりそうだが、サングラスを外す様子はない。ボサボサの黒髪をかきあげもせず、微動だにしない姿は、どこか矛盾だらけだ。

「シマ」

名前を呼ばれた少年は、動きを止めない指先から目を上げた。その視線の先には、彼よりもさらに大きな矛盾をもつた…………否、"矛盾そのもの"がいる。ひたすらにキーを打つ白い指は、その"矛盾"のモノだ。

「もうそろそろ終わるから。準備して?」

「矛盾」はノートパソコンの画面を見たまま、明るい声で言つ。バックライトに照らされた楽しそうな笑顔に、シマは首を傾げた。

「え? そうかな。なんか照れる」

シマは声を発していないが、”矛盾”は一人で喋り続ける。

その指は、喋りながらも一向に止まらない。

「警察を呼んだのは、会いたい人がいるからだけど、ね。久しぶりなんだ、”遊ぶ”の自体」

えへへ、と、”矛盾”は無邪気に笑つてシマを見た。

「シマ、大丈夫。楽しいけど、”忘れもの”はちゃんと返してもらうつもり。…………え、シマもそう思つ？嬉しいな。うん、わたしは……怒つてる、もちろん」

相変わらず、シマは一言も発していない。

キーボードの音は、いつしか止まっていた。

”片”や動き、
”方”や動かす。
細工の音は眈眈と。

カタカタ 片方 カタカタッ

episode3 片方（カタカタ）（後書き）

「」感想、「」意見など、心からお待ちしています。

episode 4 滑動再会・上（前書き）

この話は、side来島とside平瀬の2つの視点で書いています。ページ上部の表記にしたがって「りんくだい」。

episode 4 滑動再会・上

↖ side 来島 ↗

7:46分

「「」」遊びのはじまり、はじまり」

耳元で声がした。

流石に驚いて音源へ顔を向ける。周りは名前も知らない警察官で埋めつくされていて、俺には誰の声かまではわからない。そもそも人付き合いが狭いからだが、反省するような点でもないだろう。

ただ、これ以上考える前に、ことは起きた。

銃声……！

「何処だッ！」

「誰が発砲した！？」

「外か！？」

鷹鮑警視や警察官どもの怒鳴り声に呼応するように、さらに大きな音が響く。

こんどは爆発音だ。床も壁も揺れるほど。

「クソッ！ 外だつたか！ 総員、エントランスへ急げえッ！！」
多少パニックになつた鷹鮑の命令で、動ける奴は皆扉から飛び出していく。あとはオロオロとするだけだ。完全に、この国ではめつ

たに聞くことのないほど爆発音にびびっている。

「…………」

俺は”総員”の中から勝手に自分を除外し、一角の階段を駆け登り始めた。

鼓膜が軽く痺れている。

28階建てのビルで、ほぼ使われることの無いだらう階段。窓はないが、蛍光灯の白で明るい。

たしか14階には、エレベーターではカードキーを必要とし、または階段でしか行けない空間がある。

玄庭 蒼門のプライベートルーム。それを目指す。

14階から15階の間の踊り場で、俺は膝に手をついて息をついた。壁には、シンプルたが重厚なデザインの扉。取っ手の代わりに、パスワードを入力するためのパネルがある。

跳ね上がる心臓と荒い息切れに、やはり一気に駆け上がるんじやなかつたかと軽く反省した。ただ、エレベーターはキーがあつても使わない。階段なら、各階でエレベーターが動いているか確認出来たからだ。

「…………」

息を整えるついでに、ため息をもらす。だいぶん落ち着いたようだ。

「…………調子に、のむ、もんじゅ…………ねえな」

荒い息にのせるように、言葉を吐き出した。上下に伸びる階段に声が響く。一度息を吸って、背筋を伸ばす。

そして、パスワードにくる鍵がかかって扉をで蹴り飛ばした。

全力で右足

あつさつと、重い音とともにゆっくり、扉は開いた。

「……そう思つだろ。犯罪者」

部屋の中身を睨み、一步、立ち入る。

壁の片面全体がガラス窓になつた部屋は、差し込む月明かりに照らされていても薄暗い。接待よつてのテーブルやソファー、デスク、どれも高級だということは予想できた。

その、部屋の奥、真つ正面に置かれたデスクに、それは腰掛けていた。

侵入者。

「……足音は聞こえてただらう。隠れもしねえのか」
隠れると予想したんだが、

さらに2、3歩近づき、話しかけながら皿を凝らす。

侵入者は微動だにしない長身を、黒いフード付きのマントで全身を包んでいる。顔もフードでほとんど見えないが、女のよつに尖つた白い顎のラインが月光を受けて浮かび上がる。

暗い部屋の中ですら、侵入者のいるところはぽつかりと穴が空いているように黒い。

どこか物語のよつに、現実味のない姿だった。

「…………」

俺は無言で間合いをつめる。背に汗がにじむ。口が渴く。
何故だ？ 侵入者は威圧するどころか、一寸すら動いていない。浅い呼吸の音と、デスクのコンピュータの機動音しか聞こえないといふのに。

この違和感は、。

静かな戦いと平行して、その戦いは華やかに滑稽。

ふいに田の前に現れたから。

「え……つまあいッ！？」

思わず、ぼくはみつともなく叫んで、田の前を覆う布切れを掴みとってしまった。

「ちょ、さやわあんつ！」

布ごしに田高い声がした。女の子の声だ。
絡み付く大きな布を必死に剥がすと、こつちに走つてくる鷹鮑警視の姿が見える。

か、顔怖い。なんか怒ってる？ 単独行動で刑事に言われたことやつてたのがまずかつたですか？

「君！ 何をしている！？ さつせとソイツを確保しりッ！」

警視が怒鳴りながら指差す先……ぼくのすぐ後ろに、ぼくより頭一つ分小さな人影も見えた。あまりの近さにギョシとする。
でも……。

「へ……？」

その子の、格好の奇抜さの方がびっくりした。

……ロロロだ。

ふりふりはではでな水色、膨らんだ袖と首にも豪華なフリル、尖った靴、白い化粧は薄く、ピンク色の緩いカーブを描いたセミロングの髪。

まじじことなき、ピロロだ。

何より印象に残ったのは、ぱっちりとした田と、星型のペイントで……正直、かわいい。

イラストとかで見るよつたな不気味なやつじゃなくて、マスコット人形みたいだ。

「コラアッ！ 何をボーッとしてるー？ わたれどの”化け物”を

「ば・け・も・の？」

鷹鮑警視の怒声に、ぼくよりもピエロ（？）が反応した。びっくりしたように見開いた目とすばめた口が、キューッとい口月型に縮む。

「……うふっ、ばけもの、かあ、うふふっ」

笑い出した。あ、声もよく聞くとかわいい。子供かな？ いくつだろう。

なんて、現実に追いついていない頭で考える。

「おじさん、ヨコウなあいんだ。こえ、うらがえって、かわいそ」

ピエロは、細い指をひらひらと振つてから、急にしゃがみ込んだ。

「えつ」

相手がピエロの格好の不審者だといつことも忘れて、思わず手を差し延べる。

「えつと……だ、大丈夫？」

間抜けな声で話しかける僕を見て、ピエロはまたきょとん、とぼくを見上げた。

「つて、コラ平瀬ツ！！」

さつきの先輩の声がする。

「す、すみませんっ！ でも、怪我してたら大変じゃないですか！」
「刑事なら、絶対助ける！ そんな確信があつて、ちょっとだけ強い姿勢になれた。

「この子が犯行予告の犯人だとしても、怪我させちゃダメです！
ダメでしょう！？」

「バカツ、違うー！ 早くそこから……」

「だつて！ まだこんな」

子供なのに、というほくの声は、小さな悲鳴になつて消える。

ピエロが、その脚力だけで思いつきり飛び上がったから。

「……………！」

声が、出ない。

「……………！」

ピエロは空中で華麗にバック転を決め、かなり離れたトラックの荷台に着地した。

トラック……そつか、気づかずに出でてきたけど、リリーゼビルの裏、大型駐車場だつたんだ。

あ、軽く現実逃避してた。

「おにいさん、やわしいっ！」

ピエロはぼくに向かって、ふんわりと、あどけなく笑う。
「でも、ちゃあんとつかまえないと、コレ、もってっちゃうよ？」
彼方に立つたピエロの手には……袋？ サンタクロースみたいな大きな袋の口が握られている。まさか。
もしかして。

「わ、”忘れ物”…………？」

「ビンゴオフ！」

手足をばたつかせ、ピエロせりつけしそうに笑う。
やつぱり。

ちょっと、かわいい。

〈 side 来島 〉

カーペットに点々と、朱黒いシミが作られる。

「……………ぐッ！」

傷が熱い。

脇腹を押さえ、膝をつきそうな体を深呼吸で抑える。
たいしたことじゃない。痛みには慣れている。傷は浅い……と思
いたいが、肉をえぐり取られた。内蔵が無事なだけだ。

「

侵入者は何も言わず、俺を見ている。無機質、かつ不気味。生氣
を感じない。銃を取り出す動きすらなかつたが、撃つたのはコイツ
しかいないはずだ。

何処だ。

否、考えるな。

傷を押さえたまま、フラフラと走り出す。

即、破裂音。元居た場所に銃弾がめり込む。

出血で目が霞む。だが、霞んだ目にもよくわかるほど黒い影に向
かって、空いた腕を振り上げた。

拳が、侵入者にめり込んだ。

白い首が胴体から離れて飛び、黒いマントがスルリと落ちる。そ
の中に隠されていたマネキンのような人形の、くり抜かれた腹の中
に、

「残念、だね」

彼女は足を組んで座り、言った。

瞬間。

「…………ツ！？」

銃弾が、太股を貫通した。無理矢理動かした身体は、至近距離から銃撃による反動には耐えられず、今度こそ膝をついた。視界の端をぶらつく靴先に、ひざまつかされているようだ、とさえ思う。

文字通り、”犯罪者”に屈している。

「大丈夫。血管とか骨には当たってない……と思つ」

頭上で少女の声がする。ギリ、と自分の歯が擦れる音が妙に頭蓋に響いた。

クソ。油断、したか。

「まあいつか。コンピュータとはいえ誤差は出るし」

ふわり、と頬に風があたる。少女がデスクから、俺の側に飛び降りたらしい。しゃがんでいるのだろうか。目線を上げれば、撃たれたとき見なかつた少女の全貌が見える。

月光が強さを増した。

膝をついた俺の胸くらいの高さにそいつの頭があり、腰まである黒い髪を下の方で二つ結びにしている。細いフレームの眼鏡。その奥の目が澄んだ紫色に見えたのは、月光の反射のせいか、目の霞みのせいか。

藍色のシャツに黒いパンツ……奇しくも俺と似た格好だが、突けば折れそうなほど細く、小さい。

「この部屋には、『対侵入者用ウェポンセキュリティ』つてゆう危ないものがあるの。サイレンサ付きの銃が、”来客”の死角に隠れてるんだって。まあ、パスワードとIDがあれば簡単にハッキングができるけど……見る？」

少女は、ノートパソコンをたたんだ膝の上に乗せて開き、俺に向けた。見せられたところで、どれほど侵食されているかが解るはずもないのだが。

「蒼門つてさ、ドジだから。急所じゃなくて腕とか足とかに当たるようaprogramしてみた。なんか鞭とか手錠とかあつたし。

趣味悪いな、まつたくもつて本当に「

アイツは嫌い、という少女の声が近い。

「…………何故、だ」

「うん?」

少女はこてん、と首をかしげる。年相応の仕種と喋り方だ。

声に苦痛が滲まないよう喋るのは難しいが、お喋りな犯罪者から情報を引き出すのには、一いちから仕掛けなければ。

「表の騒動はただのダミー、こつちの貴様が真打ち…………だろ」「うん」

「そこまではいい……予測できた」

『手品師が右手を出したら、左手をみる』といつ言葉通り。4年前と同じ戦略。

「ならば何故、貴様のような子供が送られた…………?」

「本当に欲しいのはデータだつたし、早く済むうえ力もいらなかつたから。私が来ても大丈夫つて…………あれ?」

少女はしゃがんで、俺の顔を正面から見上げた。つり目だが大きい両眼は、やはり吸い込まれそうなほど澄んだ紫だ。日本人じゃないのか。

「『送られた』? 私が?」

「…………」

何だ、噛み合わないのか。

「…………クロコ』という野郎を、知っているはずだ」

「うん、まあ」

やはり、あの時の 4年前の怪しい集団の一昧か。

記憶の中で取り逃がした”そいつら”の中には、ガキも混ざつていた。

「貴様の仲間共は…………ツ」

ふいに意識した痛みに歯をくいしばる。今ここで倒れるわけにはいかない。時間を稼がなければ。

ようやく掴めそうな”手がかり”を、みすみす逃してたまるか。

「……貴様のもとに、着くのが、複数だとは考えなかつ、……たのか……？」逃げ道は階段かエレベーター……3人以上いれば、1人の犠牲を出してでも、退路を塞げる……

「あれ、その犠牲が嫌だから、いつも一人なんでしょ？」刑事「俺は目を見開く。

「いつも……？」

「な……」

「勘違いしてゐるの？ 刑事、これは4年前とは違うよ」混乱し押し黙る俺に、少女は笑つて両手を伸ばしてきた。

「たぶん今回は私の勝ち。だから教えてあげようか、刑事」

時間の流れが遅くなつた。

不思議なほどゆつくりと近づいてくる、少女の細い腕から逃れるほどのこと、今の俺には不可能に近く。

そのまま、首に腕をまわされた。

「”盗まれた”んじゃない。”シモン”は”逃げた”の。自分の力で」

「…………！」

頬にやわらかい感触がする。

「監視に気づかれないように、こつそり仲間を集めで」

首に息がかかる。

子供の体温を感じる。

まわされた腕の強さも。

「貴女……才、マニア……」

「動機はね、3つもあるんだ」

今更気づいて、驚愕した。

俺は、俺を出し抜いた“犯罪者”に何をされている?
まるで。

“玄庭グループ”と蒼門への『復讐』。4年前に垣間見た世界への『好奇心』。それとね

娘が父親にするような、躊躇いのない抱擁。

俺のものと同じように、少女……シモンの服も、俺の血で染まる。

「私をその世界に出してくれた、キジマ刑事に会いたかったから。

ねえ、遊ぼう?

4年待ったよ、キジマ刑事

一人分の鼓動と、シモンの軽やかな笑い声だけが聴こえる。

episode 4 滑動再会・下（後書き）

「J感想、「J意見など、心からお待ちしております。」

episode 5 Palcosceco - 上(前書き)

前話と同じように視点が切り替わります。

◀ side 来島 ▶

するりと、名残惜しそうに肩を撫でながら少女の腕が離れる。あ
だけなく笑つて、少女 シモンは立ち上がつた。

「ちょっと待つてね？」

「…………」

わざわざ言われなくとも、待つしかない。気づいた時には、俺の
体は微動だにしないほど硬直していたのだから。

「…………何、を、仕込み、やがつた…………」

「普通の火薬弾だとダメージ大きいから、麻酔の一瞬を含んだ特殊
弾にしてみたの。…………痛かったよね、『ごめんね』

笑みから一転し、眉を下げ目を細めた少女 シモンを、俺は改
めて見つめた。悲しそうなその表情には、確かに俺の知るシモンの
面影がある。

4年前、シモンが玄庭 蒼門に手をひかれながら振り返った刹那、
網膜に張り付いて離れない…………あの表情。

「シモン……生きてた、のか。蒼門はお前を…………」

「あれ、心配してくれたの？ しかも、すぐ久しぶりに名前呼ん
でくれたねっ」

目と鼻の先にある顔は、再び口口りと笑顔に変わる。4年前には
見られなかつた顔だ。ずいぶんと感情豊かになつたらしい。
だが…………。

「蒼門なんてどうでもいいよ。何にも……本当に、何にもなかつた

から

そう言つて、シモンは踵を返してデスクに向かう。パソコンを開いて頷き、引き出しを片つ端から開けている。

その背を見て、が4年前と大きさも細さも、ほとんど変わらないことに気づいた。

栄養失調から、か。

「…………ク、ソ……が…………ツ」

痺れた口で、絞りきるように毒を吐ぐ。

かつて蒼門からシモンを救えなかつたことにも、動かない肢体にも虫ずが走る。

「あつ、あつた」

「…………ツ！！」

広い部屋を小走りに、嬉しそうに走り寄つてくるシモン。その手に見慣れない薬瓶を見つけ、俺は、思い切り睨みつけた。平瀬に対しても本気で睨んだから、酷い日つきになつたはずだ。

奴はびくりと肩を竦めて立ち止まつた。

「…………ただの止血剤だよ。痛そだつたもん」

しゅん、とうなだれるシモンを見て、僅かに罪悪感が沸いてくる。大人気なかつたか……？

「…………くつ」

いや、傷の痛みと眩暈が思い出せやがる。

「…………ここつは、確保すべき犯罪者だ。」

「…………俺と遊ぶ、と、言つたな……何をする氣だ」

「キジマ刑事の旦、怖いから、言わないもん」

「…………」

何を、平瀬みてえなことを。

うつむくシモンの頬は膨れている。むくれているらしい。

ガキだ。

「もう一回名前呼んでくれたら、教えてあげる」

うつむいたまま、シモンが拗ねたように呟ぐ。

なんだそれは。

「……………、シモン」

結局、俺は考えるよりも情報を優先した。とたんに、シモンは勢いよく顔を上げる。

「うんっ！」

機嫌は治つたようで、再び俺の前にしゃがんだ時には笑顔になつていた。

いや、だから、なんなんだ。

「まずは、”私”を”造る”ために…………世界を搔き回しちゃいますっ！」

手を挙げ、声高々とシモンは宣誓する。

「…………どう、いう」

「自由になるまで、キジマ刑事以外の”外”的人と喋つたこと、なかつた」

「…………ッ！」

予想出来ないことじやなかつたが、本人の口から聞けば衝撃は大きい。

監禁…………”児童虐待”に含まれる。

「私が”外”について知つているのは、ネットから手に入るただの『情報』だけ。喋り方も、『女の子供の喋り方』を調べて真似ただけ」

残酷な事実を、シモンは淡々と明かしていく。

「知つてるだけじや、何も現実味がなくて、つまらなかつた。だからね、暴いて曝して覗いて読んで聞いて嗅いで触つて感じて、理解しつくしたい。そのためには、合法だけじやだめだよね？」

シモンの指が警察手帳の入つた胸ポケットに触れた。

「…………今回みてえな、ハッキング、窃盗…………テロリズムも起こす予告か」

「うん！だから、『鬼ごっこ』。私は”犯罪者”として逃げて、キジマ刑事は”警察”として追いかけるの。楽しそうでしょ？」

「……疲れそう、だ

「でも、お仕事だから来てくれるよねー。」

シモンの邪気が無さ気な顔に、溜息がもれた。ただの計画犯とは違い、子供の犯罪者には邪気がないことが多い。やりにへいときたらありはしない。

なうば、同じか。今までどおり、”滑動”するだけだ。

頼むから、上手くやれ…………平瀬。

◀ Side 平瀬 ▶

走りすぎて喉が痛い。必死の呼吸は、甲高い音になつて鼓膜を刺す。

視界の端に、警察のサーチライトを反射したスパンゴールをとらえた。

「つ、かまえ…………えつ？」

すかさず走り込んだトラックの裏には、誰もいない。

「どこに……」

「こまこだよつ」

楽しげな声は真後ろの、上空から降つてきた。

「は……」

「あれっくそーのおつづー……」

背中への衝撃に、背骨が軋んだ音をたてる。何をされたのかもわからぬまま、気づけば顔を押されて転がっていた。トラックの荷

台に顔面からぶつかつたみたいだ。

「い、痛い……体中痛い！ 鼻血も出ている……あいつとトライックに付いちやつただろうな。

「おにいさん、だいじょぶ？」

ふいに真上から降つてきた鈴のなるような声に、背筋が凍りついた。

こんな小さな子供なのに、なんでこんなに怖いんだろ。

「あはははははっ！ でも、もうおつかれてる、おにいさんだけだよ！ いつかいでもつかまえられたら、”わすれもの”返してあげるのにっ！ ケイサツつてだらしない」

体を大きくそらして、ピエロ少女はケタケタと笑う。何がそんなに楽しいんだらうつてくらいの大爆笑。

「……や、

「”や”？」

「や、さつきの掛け声……何です、か……？」

ぐぐもつた声で尋ねれば、ピエロは動きをピタリと止めた。

「きになるの、ソノ？」

……自分でもちよつとそつ思いました。でも、気になりますよ、『あるれつくいっくうーの』……。

僕が再び立ち上がりうつと膝をつくと、少女は不満そうに足元を蹴る。それは、拗ねた子供の動作そのものだ。

「……しつこいなあ

そのまま蹴つた足をまっすぐ振り上げ、僕の肩に降りす。静かに、それでも確かな靴の重みに体がよろめいた。

「うう……」

「ほかのヒトみたく、さつさとあきらめてほしーな。イタイでしょ？ ハワイでしょ？ だれも、おにいさんをせめないよ、みんなそ

うだもん」

視線をあげると、体を横に曲げてこちらを覗き込むピエロと目があつた。ここはサーチライトからは死角で、ビルからの僅かな明か

りしか届かない。それでも、ピエロの大きな目はそれを映しだしてキラキラしている。その目も、また三目円型に細まつた。

「みんな、ううじかるのこ、ううじけないフリしてたよ? 」『ばけもの』は、イタイし口トイから。おにいさんもはやく、ねちやつたらいいよ。そしたらもう、けらない。イタくないよ? 』

倒れてしまつことを促すように、肩に置かれた足に微妙に力が入る。正直、2回も蹴られているだけに、少しの重圧でも痛みで悲鳴があがりそうだ。3回も蹴られたら、本当にびくとも動けなくなりそう。

……ん?

「『』、このまま倒れたら、蹴らないの? 』

「……むい? 』

「えつと、僕らがその、倒れたフリをしなくても、君なら何回も蹴れば本当に倒れちゃいます。それなのに、僕が倒れたフリをするのを待つてくれるんですか? 』

きょとんとした顔のピエロこ、僕は笑いかけた。

「意外と、優しいね

「ふえッ! ? や、や、や? 』

「そんなことが言えるのは、『ばけもの』じゃなこと思こます

「やつ、や、や、さしにくないよッ? 』

困惑したように視線を泳がせるピエロは、ちょっと照れているのかもしれない。子供らしい仕種だ。

「でも、ごめんね。まだ、倒れられません

ピエロがこっちを見て、また目があつ。

「さつと、刑事がどこかで戦つてから……僕だけでも最後まで、刑事と戦いたいんです! 』

真剣に言い切れば、呆れるかと思ったピエロの目が、今度は満月型に見開かれた。そして、そのままふわりと笑う。

「 しょうがない。それがだいじなヒトなら、しょうがないよ。ボク
も、だいじな”トモダチ”のためにここにいるから 」

「 っ！」

きっと、”ばけもの”っていうのは……あの”玄庭 蒼門”み

たいなのを言つんだ。こんな女の子のことじやない！

ピエロの笑顔と、彼が刑事に杖を投げつけた時のこと思い出して、僕はそう思った。

思つた、瞬間だつた。

サーーチライト、電灯、ビルから漏れる光さえも、全てが消え去った。

動搖しているのは彼らだけじゃない

あれ？ ああ、アーヴィング君？

驚いたような高い声が聞こえた瞬間、僕は肩に押し付けられた足を両腕でつかんだ。

細くて、正直”こんなこと”をすると折れてしまいそうで怖い。もう就りつ運動をまといはてせん氣にする。

「その……、ちょっと痛いから、ごめんなさい ッ！」

「あら、今日の少尉の体を回転に連れて込む」

111 104

ざりと音がして、僕もピエロも「ンクリートの上に転がった。空中に逃げられたらチャンスは無くなつてしまふから、掴んだ足を離さないよう」に、柔道の要領で両手足を固める。武道のなかでは一番出来がよかつた、所謂、寝技。

でも、な、何も見えない……変なといひ触りけりつたひびつ
よひ、一応小さくとも女の子だから焦る……！

しかも、もう体力も痛みも限界だし、抑えられる時間は短い。
から、最低限の僕にできることをしないと……！

「はなす」もさうした

彼女の持つ袋に届いた。

「ぐはッ」

幸か不幸か、蹴られたおかげで勢いがついて、僕は”大切な忘れ物”が入った袋を掴んで吹っ飛んだ。

予備電源が動いたのか、電灯が数個ついた。着地した背中も蹴られた腹もすごく痛い。それでも何とか上体を起こすと、ピエロも上体だけ起こしてこちらを見ていた。

きょとん、としている。

「……た、逮捕は、無理だから……勝てる気がしませんし。さっきのも、『停電が起こる』ってわかつてたから、できただけです」動かないピエロに、声を絞りだして話しかけた。話すだけで体中がギシギシと悲鳴をあげる。でも、しつかりと袋を握り直した。

「い、一回でも捕まえたら……返して、くれるんですね?」

「……とられちゃった、ら、ボクの、まけ」

間を開けつつ、自分に確認するようにピエロはつぶやく。

「……しつぱいしちやつたよお……」

「あ、あい、まづい、涙声になつてる。いつものしちやつたし肩震えてるし……な、泣かせた?」

「あ、あの……、ツ!？」

ふいに、空気が変わる。

俯いたままのピエロから、”殺氣”と呼べるほどのプレッシャーを感じて、思わず息を呑んだ。

『すでに狩られた自分』を、空想させるような恐怖感。

「勝手に終わらせちゃダメだつて、”ブルチネ”」

背筋が、ぞわりと粟立つ感触。ピエロに感じた恐怖とはまた別の、もつと、おぞましいといつよつた。

「…………イズ……!!」

「どこからともなく聞こえた声に、ピエロが顔を上げずに呟く。

「だ、誰ですか……!？」

「そこのピエロを迎えて来たんだけど

落ち着いた男性の声、でもすぐ若い、高めの声だ。

突然、まわりの電灯が次々に砕け散った。声をあげる隙もなく、暗闇で包まれた中で、”何か”が側に降り立つ気配を感じた。「そのまま蒼門に返されるくらいなら、壊して……シモンの意思」「え……!? うわっ……！」

腕の中の袋から、カシャンと何かが割れる音がして、僕は慌てた。「わ、割れ……一体何が……？」

「プルチネに殺されなくてよかつたじゃんか」

再び空気が動き、側にいた”何か”が移動したのを感じる。

手を伸ばそうとしても、もう立ち上がることもできなさそうだ。

「ま、つ……て！」 “プルチネ”つて……殺すつ、て……！？

“作戦”はほとんど終わつたし、あとはシモン回収して帰る。……それ、大事に持つて帰んなよ

微かな音をたどつて視線をあげると、抜きん出て高い電灯の上に、月明かりでシルエットが浮かび上がる。

宙を飛び舞う姿は、影絵みたいに映えた。

一つは、きっとあのピエロ。
もう一つは……。

「……え？ アレって、”う”……」

緊張感を失つた僕の意識は、ここで途切れてしまった。

最後に、カメラのフラッシュが瞼をかすめた 気が

す
る。

「感想、意見など、心からお待ちしています。

episode 6 回進撃・上(前書き)

< side 来島 > のみになります。

空気の焦げる臭いが嗅覚を刺す。

「動くな」

しわがれたの声に、視線だけを後ろへ流すと、そこには鬼の形相の男がいた。

髪を乱し目を血走らせ荒い息を吐くそいつの腕で、ライフルほどの大さの機器が時折青白い光を放つ。

期待していたものと違つてしまい、嫌な予感しかしない。

「……動くな。シモンも、その死に損ないもだ」

それはこつちの台詞だ。杖をかるうじて支えにして倒れそうなそいつの方が死に損ないに見える。

「なんだ、来たんだ。何しに来たの？ それ、『スタンライフル』？ そういうえば、そんのもあつたかな」

俺の前でしゃがみこんでいたシモンが立ち上がる。目を離した隙に持つてきたのか、あのパソコンをケーブルごと引きずつて抱えていた。

「動くなと言うたろうが……！」

「命令は聞かない。もう私はあなたの道具じゃないんだよ……おとうさん」

「黙れええッ！…」

臆すことなく言い放つシモンに、男は 玄庭 蒼門は、血走つた目を剥いて叫んだ。

シモンを、道具にした男。その“希代の天才”の脳を借りたとはいえ、企業を発展させ億の富を作り上げた、カリスマ。その男が、醜く激昂する。

「貴様、誰のおかげで生きてこられたと思つてゐる…？ 所有物の分際で持ち主に逆らつて、ただで逃がすとでも思つておるのかツ…？」

「…………」

「一生追い回してやる、誰にも渡さん… 貴様は我輩の娘なのだ、我輩の物だ… ツ…！」

「トイツも、かなり変わつたらしいな。

黙つたままのシモンにまくし立てる蒼門を観察し、改めて思つ。睡を散らしながら喫く姿には、かつての威厳などどこにもない。むしろ

「…………ねえ、かわいそつになつてくるから黙つてよ
シモンと感想が一致したらしい。

沸き上がるものは、『憐れみ』にほかならない。

「わかつてゐよ。私がいなあや、おどつせんも『玄庭』も終わりだもの」

「きツ…………！」

シモンの落ち着いた、しかし見下したような物言いに、蒼門が怒りで痙攣しだした。マジ、ギレ一歩手前か。

マズい。それ以上刺激するな。

シモンは手の中のパソコンで、この部屋のセキュリティをコントロールするつもりなのだろう。死角に隠された複数の銃器は、この部屋そのものをシモンの武器にする。

だが、問題なのは蒼門の持つ武器 『スタンライフル』。

「きき、き、きききき貴様ア……ツ」

正気を失つた蒼門がそれの『引き金』に触れると、銃でいうところの『銃口』から目で確認できるほどの電流が瞬きだした。『スタンガン』と同類だつうが、電圧のケタが違つ。『ライフル』つてからには、リーチもそれなりに長いんだろう。

蒼門の杖付きの足じや、セキュリティに撃たれる前にシモンに到達するのは無理だが……キレた奴なら、共倒れを望むかもしない。

不運にもこの部屋はカーペット敷だ。唯一の出入口に立つた”凶人”が、銃口を下に向け落とすだけで　火の海が、すぐに広がるだろう。

全員死ぬのは確実だ。

「我輩をツ、誰だとお……ツ」

シモンが、激昂する憐れな『老獴』に、とどめを刺そうと息を吸い込む。道連れの危機に気づいていてもいなくとも、シモンは精神攻撃をやめないはずだ。

”復讐”の一つとして。

それなら。

俺は窓の外に目を向け、広大な駐車場の電灯がうつすらと眼下を照らすのを確認した。

おそらく、チャンスは一瞬だろつ。

今までこの歪んだ親子の会話に耳を傾けていたが、それを止めた。本格的に視覚……そして、痺れた全身の感覚に集中する。

何も聞くな、今更だ。

“……”育てた”、なんて言わないでね。おとうさんは私を”生かした”だけで、他のことは何にも……人間の親がすること、なんにもしてくれなかつたくせに

集中しる。

「それなら、キジマ刑事のほうがずっと”父親”だよ。4年前……

あの短くて楽しい時間、世界の断片を見せてくれたもの

まだ、時間はある。

「あれ？ でも、私はあの時に生まれたようなものだから、むしろ”母親”なのかな？ ん？……？ わからんない……」

……誰が”母親”だ、誰が！

いや、何も言つまー……集中しろー

「……まあ、とりあえず、私にとつての”玄庭 蒼門”は、私にとつての”キジマ刑事”には遠く及ばないってことだよね、そういう！」

……迷うな。

自分で言い聞かせる。

「だからね、『憐れなおとうさん』、もう道具はいない。自分の足を使わなかつたあなたは、もう進めない」

……。

「大嫌いだよ。おとうさん」

.....。

「.....貴様がこれほどまでに余分かつ俗なことを覚え考え、狂つたのは.....この男が原因なのだなア.....」

長い沈黙を破つたのは、完全にキレた蒼門のつぶやきだった。背筋を、電流を纏つた殺気が這つてくる。今、あの凶器はシモンでも床でもなく、俺を向いているようだ。

あの銃口はシモンには届かなくても、間に挟まれた俺には届く。この出血量、一瞬でも掠ればショック死はまぬがれない。

「近寄つたらダメ！ 殺すための銃だつて残してあるからシモンがキー・ボードを叩く音がする。俺を庇つようなタイミングのそれを、今度は視線を外に向かつても妙な気分で聞いた。間に合わなかつたか。いや、俺を向いているなら、少なくとも共倒れは俺だけだろ。好都合だ。

お前は生き残れるだらうからな、シモン。

法の元に捕われないのならば、いつそこの凶人からは自由になればいい。

視界が暗く染まつた。

「…………ッ！」

唯一、視界に定めていた電灯が消た。
速やかに脳が冴え渡る。

よくやつた、平瀬。

膝に力を入れ、立ち上がるついでに体を反転させる。
呆然とした面の蒼門に素早く近づき、光を失つた『スタンライフル』を持つ手を容赦なく蹴りつけた。

「ぎやあッ」

しわがれた叫び声と共に、ゴトリと重い音をたてて凶器が落ちる。
蒼門はそのまま力尽きたように一步、二歩と下がり、尻餅をついた。
俺が大股に近づき手錠を取り出したあたりで、見上げる虚ろな両眼
は激怒と憎しみに染まつていく。

「こつ、この、な、な、な何のつも、つもりで、わ、わが、我輩
にツ、し、しし、死に損ないがア……ッ」

「…………お前が、な」

カシヤン、と軽い音をたて、手錠はなんの抵抗もなく蒼門の手首
に収まつた。

「この部屋の銃器の数……十分、”銃刀法違反”だろ。セキュリテ
イだとしても、”防衛過剰”は”傷害罪”に含まれる……スタンガ
ンとかな」

「こッ、こ、このッ……」

「年寄りは大人しくしてろ」

虚ろな目に戻った蒼門は、もう立ち上がる様子もない。口からは意味を成さない息が漏れるだけだ。

「まあねえ。

頭の中でだけ舌を出してやる。コイツの罪は、これでも軽い。

「…………なるほど、やられちゃった」

ふいに響く、場違いなほど明るい声に振り向いた。

シモンが、そのままの場所でパソコンの画面を眺めていた。

「とても優秀なセキュリティシステムも、『スタンライフル』も、電力が無ければただのガラクタだもんね」

右手でひたすらキーを叩きつつ、つぶやく。ディスプレイの光に照らされた顔は、頬をふくらませ唇をとがらせた、拗ねた子供そのものだ。

「わつ、予備電源のシステムまで機能してない……おかげで、欲しかったデータのダウンロードが中途半端だよ。36%しか盗めてないや」

「そいつは上々だ」

平然と返すと、シモンは顔を上げて俺を見る。かち合った視線はひどく不思議そうだ。

「…………なんでそんなに元気？」

「…………元気に、見えるかよ」

「フラフラだけど、薬入つてるのに立つたし、蹴つたし

「体質だろ……薬品には強い」

”あのカスのせい”で、という言葉は飲み込む。

シモンは、納得したように数回頷いていた。

「でも、撃たれた傷は？　たくさんの出血も」

「骨は無事なうえ弾は小振りだ、十分歩ける。お前等が長々と喋ってる間、まあまあ休憩させてもらつたしな……」

「一步、近づく。」

「ガキ一匹、確保するには……………十分だ」
シモンはハツとしたように、一歩下がる。武器を奪われたのが自分だけではないと、気づいたらしく。

「…………すごいね、キジマ刑事」

一歩、三歩と下がり、田を見開いて俺を見てから、シモンはどこか嬉しそうに笑った。

「勝ったと思ったのに……追い詰められてる。逆転ってやつだよね。やつぱり、私の遊び相手はキジマ刑事しかいないや」

「その遊びも、”終い”だ」

「そうかなあ？」

眉間にシワが寄るのを感じた。部屋の奥へと追い詰められているにもかかわらず、シモンはパソコンを抱きしめ、楽しそうに体をコラコラとさせている。

「ハイシの、この余裕はなんだ？」

「今回はもおいいや。蒼門は逮捕されるし、情報なんて、このビルが廃れたあとに拾いにくればいいもん。……なにより、キジマ刑事に会えたし！」

また、無邪気に笑う。

「シモン」

その笑顔はどこか脆く、危うい。そう思つた時、思わずその名を口に出していた。

だが。

声は、ガラスから響きわたる悲鳴のような音に搔き消された。

「なッ」
「さやあつ」

振り向けば、ガラス窓一面が白く曇つて、いや、そう見えるほど細かくヒビが入つてゐる。

”
そして、シモンよりさらに奥のガラスを突き破り、人型の”何か”
が、部屋に侵入した。

卷之三

何で冷静なんだ、俺。 14階だぞ、ここは。 隣にビルがあるわけでもない

『**侵入者**』はガラス付近でしゃがみ込んでいたが、やがてゆつくりと立ち上がった。

馬
だ。

異様としか言えない格好に、しばらく言葉が宙をただよう。

指先までおおう、タイツのような全身スース。だが、足はフーツ……いや、”蹄”^{ひづ}が付いている。何より、頭によく仮装用に東急onzで売っているような、ゴム製の馬の被り物をしていた。それも、ご丁寧にスプレーか何かで黒く着色されたのを。

『侵入者』から、『変質者』へと認識を改める。

あー、イスミー、レーテイミングたよ！「フルチネは？」
シモンの言つてよからすれば、『変質者』ではなく『協力者』ら

七

「共犯か」

それにしても、一人ではないとわかつてはいたが。

少なくとも、一人。だが、目の前の馬
背も体格も成人のものとは程遠い。

「……監禁されていたお前が、どうやって集めた？」

シモンは俺に向かい笑つて見せたあと、軽い足取りで、”イズミ

”と呼ばれた『協力者』のもとへ歩みよる。

「プルチネは失敗しちゃった？ 私もだけど」

「……ああ」

喋れるのか。

「アレは警察に」とられたけど、割つておいた。シモンの望みどおりに

「そつか、ならいいやー 半分成功つー 帰るつー。」

「……待て、」「う」

ようやく我に帰り近寄ろうとするが、初めて”馬”、いや、イズミはこちらを見た。見えているのかはわからんが。

「はじめまして。シモンの父です」

「……下手な嘘つくな」

すぐそこで本物が呆けてるだろが。

「スミマセンが、今日のところは帰ります」

「……俺がそのまま逃がすと思つか」

「いや、まだ娘を嫁に出すつもりはないんで」

「……無理があるぞ」

会話で精神力を削られる。……俺は何故、”馬”と真剣に喋つてんだ……。

「いいじゃないすか。警察さんにはもう十分オトクな”情報”がいつてるし」

言いながら、イズミはシモンを軽々と抱え上げ、肩に座らせた。

「待てッ……」

間合いを狭めよつとしだが、ふいに暗くなる視界にまた膝をつく。膝で踏んだガラスの破片が、ジャリ、と音をたてた。

クソ、血が足りねえか。

本格的にさつきの一撃で限界だつたらしい。

辿り着けない。

「あつ

「何、どした、また、忘れ物？」

「行く前にキジマ刑事にあこがつしなきや」

「ホントに氣に入つてんだ」

「うんつ。……キジマ刑事!」

震む田を上げれば、月光の元に浮かび上がる影が、妙にはつきりと見えた。

割れた窓の淵で、イズミはいつでも飛び降りるとばかりに立つている。その肩でシモンはこすり向きに座り、笑つた。

「さつきのキック、かつこよかつたよ! でも、あの時もしも私も捕まえてたら、私を逃がさなかつたよね。何で蒼門からにしたの?」

「…………ッ、知るか……」

「…………きつと、キジマ刑事も怒つてくれたんだよね。4年前も、私のために怒つてくれたから」

シモンが眼鏡を外す。あの深い紫の田が、ガラスの破片が放つ月光と共に、俺を映した氣がした。

「引き分け、だよ。だから、また会いに来るね、キジマ刑事つ。」

その言葉が聴こえたとき、黒い馬も、少女も、闇の中に消えた。

「…………は、ッ

結局、奴の”遊び”は始まつたのか。

背後に、階段を駆け登る足音を複数聞きながら、意識だけは飛ば

さないよう、ガラスの破片を握りしめた。

面倒だが、説明の義務がまだ、残つていやがる。
平瀬も探さねえと。

面倒だ。それでも。

今までほど、何故か荒むことはなかつた。

「感想、意見など、心からお待ちしています。」

episode7 私事仲間・上（前書き）

突然視点が変わります。

読んでいくとわかると思いますが、ごめんなさい。

国立病院の入口前には、樹木や花壇で青々とした、公園のようなスペースがある。入院患者のリフレッシュを目的とする広々とした空間も、真昼のうだるような暑さで人気はまばらだ。

そしてそこに、ひとりきわ目立つ一人が歩く。

「あら、どうして帰るの？ 折角来たんだから、会えぱいいじゃない」

「すぐに仕事で会つだらう。それに……」

グレーのスーツに見を包んだ、穏やかそうな男が苦笑する。

「公共の場でこれ以上目立つのは、ちょっと、ね」

「目立つのは嫌い、か。……フフッ、”美男子”ってのは苦労するわねエ」

「いや、君と一緒にいると目立つだけだよ」

男の言つように、すれ違う人々の視線を例外なく集めているのは、むしろもう一人の方だった。

西洋人のように背が高く、これ以上にないほど明るい色の髪は腰まで流れる。なによりその衣服の色彩は、真夏の緑のなかにくつきりと映える、深紅。

「お褒めにあずかり、光栄ですわ。上官殿」

少し膝を折り、芝居がかつたお辞儀をする。その様さえ見事に決まっていて、男はまた小さく笑つてから、出口へと歩きだす。

「来島刑事によろしく、鳥声刑事」

「頼まれてあげるわ、カシナガワ神無川警視」

弧を描く紅い唇からの投げキッスが、スーツの背へとぶつかつた。

5分くらいはそうしているだろうか。

「刑事、無事で……ううつ、無事でよかつたです……ツ！」

俺のいる病院のベットに突っ伏し、ひたすら肩を震わせているのは、平瀬。

突然、大声あげて病院に飛び込んで来たかと思うと、急に泣き出し、この状況だ。怪我人として寝かされている俺としては、非常にうつとうしいんだが。

「無事、じゃねえだろ。2週間は外すら出れなかつたしな。……つてか離れろ、腕が傷の真上にある」

シモンと再開したあの事件から、2週間。リハビリに1週間。傷が消えないまでも、かなり動けるようになつた。

その間、テレビはおろか新聞すら止められた。平瀬いわく、『上司』の命令らしいが。面倒くせえ奴は誰だか、まだわかつていない。だが、"情報規制"が起つてているのはわかる。

おそらく、シモンの。

「あつ、そうですよね……。う、撃たれたって聞いたとき、心臓が止まりそうでした！」

「……お前の方が酷そつだがな」

平瀬の、シワの寄つたスーツの背に手をやる。今は見えないが、体中に青痣があるはずだ。

「跡は残つてますけど、もう動いても痛くありませんから」
えへへ、と、平瀬は気楽そうに笑う。

「…………」

平瀬が犯人に喰いつき、ブツを取り替えしたあげく全身打撲で運ばれたと聞いたときには、真剣に驚いた。不良相手にたじろぐよくなへタレが、化物級の犯罪者に立ち向かつたらしい。

「……あれ。刑事、どうしたんですか？」

気づけば、平瀬は顔を上げてこちらを見ている。

「も、もしかして、痛みます？ 看護師さん呼びますか？」

「いや……あ、一…………」

言わないといけないのはわかっているんだが。喉を上るむず痒さをこまかすために、前髪を搔きむしる。

「…………お前のわりに粘つた、な」

「へ？」

クソ、氣恥ずかしいものか。

「他の奴等ア、すぐ引っ込んでほとんど無傷だろ。引っ込めてやれなくて悪かった」

「い、いえ、そんな」

「…………へタレにしちゃ あ上出来だ」

ぽかん、と、平瀬の顔に書いてある。その可笑しい面を見ていたら、自然に笑うことができた。

「よくやった」

明るく白い、病院特有の無色の空間。その中を、深紅のロングスカートと銀髪をひるがえし、颯爽と裂くように進む人物がいた。

私は患者の病室に向かう途中だったが、思わず足を止め、その姿に見惚れてしまつ。こんなところ、先輩医師に見つかったらじやされるだらうけど。

それにしても、すごく美人だ。外国人みたいにスラリと背が高いし、もしかしたらハリウッドなんかの女優さんかもしれない。映画は詳しくないけど。

ふと、その人がこちらを向きドキリとする。つば広の帽子が動いて、見えにくかつた目元まで見えた。光が入ったその目は灰色、"アッシュ"と呼ばれるものだ。ああ、髪が銀色だと睫毛も銀色なんだ。光って見える。

あれ、なんで睫毛の色までわかつ……？

「少しいいかしら？」

「は、はいッ！？…………私、ですか？」

ビックリした……！？ いつのまに目の前に！？

「ここに、来島っていう刑事が入院してるでしょ？ 病室を教えて

くれないかしら」

紅い唇が弧を描いた。しかし、カルテを持つ指には力が入る。"警察関係者は逆恨みを買いやすいから、むやみに病室を教えないほうがいい"、と言われたのを思い出したのだ。

「……個人情報でもありますから。失礼ですが、どちらさまですか？」

「ああ、そうね。私服だから、怪しいと思つて当然」

「い、いえ」

言いよどむ私に、彼女は黒っぽいパスケースのよつなものを差し出す。

警察手帳だ。『特殊犯罪課』…………あまり聞いたことがない。刑事

……"トリゴエ"？ 変わった苗字だ。

「同僚の預かってる担当医が、慎重な方で安心したわ。黒川 靖彦

……先生？」

私は目を見開いた。

「な、何故」

「カルテがチラツと見えたから。名前は名札にあるじゃない」

それも そうだ。

「名前に色が入ってるの、素敵ね。さあ、仕事仲間のお見舞いを案内してくださいな」

「は、い……」

なめらかそうな髪が、手に触れそうなところで揺れている。こんな人に近くで微笑まれたら、誰だってドギマギするはずだ。警察手帳だつて持つてるし、本物の刑事だ。こんな綺麗な人が怪しいはずない。うん。……いかん、勤務中なのに。

「こっちですよ」

「まかしに咳ばらいをし、眼鏡をクツと上げたあと、先導して歩きました。

お見舞い……恋人かもしだ……いやいや、勤務中だ！！

しまつた、と思った時にはもう遅かった。

ぽかん、としたままの平瀬の顔がカタカタと震え初める。

「刑事…………あ、ありがとうございます——ツツ——！」

立ち上がりながら、思いっきり叫んでくれやがった。ものすごい笑顔で。

なにより、至近距離で。

「ツてめ…………！ 鼓膜がイカれたらどうする

「でも、ぼくが犯人のスキをつけたのは刑事の指示に従つて”停電をつくりた”からです！！ やっぱり凄い……電気ごと止められるなんて、犯人も予測出来なかつたじゃありませんか！」

「おい、ここ病院」

「セキュリティの情報が流れてても、利用させないためだったんですね！ 納得です！ うわあああツ、カツコよすぎます——！」

「大袈裟だ。あと静かにし」

「ぼく、やつと警察官として刑事のお役に立つたんですね！？ うわ、感激ですツ！」

「…………」

「4年で1回かあ。でも、ぼく頑張りますから——！ 本当に、どこまでもつい、ぐはつ！」

「…………褒めさせた次にはもうこれが、この野郎！」

ネクタイを掴んで引き、落ちてきた平瀬の頭を片腕で固定、もう片方の拳でぐりぐりと締め上げる。

「痛たツ！ ちよつ、い、いたい痛いツ——！ ヘッドロック痛いですツ！ 割れる、あたま割れる——ツ——！」

「五月蠅い！ 病院では静かにしやがれ！」

「さまあみろ と思つたところで、『マイシのせいきの薬葉がふいによみがえつた。

”4年で1回”。

「……お前、4年も俺に付き纏つてたんだな」

「いたつ、ひ、ひどいですよ！ ぼくは刑事の役に立ちたつ、いたたつ」

「褒めてんだよ」

締め上げる力を緩めずに呴く。なんだかんだで長い付き合いだ。そこまで俺とやつていけたのは正直、感心するといつが、変わつているといふが……。

「だが」

腕の力を抜いて平瀬を解放し、脱力感に任せて上半身を沈ませる。

「痛……くない。あれ、刑事？」

「これから、俺と距離を置いた方がいいんじゃねえか」

「…………え？」

頭を押さえながら丸椅子に座つた平瀬が、心なしか青ざめた顔で身を乗り出す。

「そつ、そんな……ぼく何か、失敗を……！？」

「いや、結果は”成功”だ。お前はやるべきことをやつた。……騒ぐなよ」

平瀬の顔が再び輝いたのを見つけ、早めに睨んで釘をさす。

「悪かったのは”運”だけだ。その現場には、鷹鮑がいたる

「鷹鮑、警視……」

平瀬もハツとしたようだ。

鷹鮑警視。現場の指揮官であり、田下からの忠告を嫌う奴が、部下が単独行動から功績を得たという事実を喜ぶだろうか。

「お前は目立たない。俺の代わりに多少ふらついてても、田をつけられることはなかつた」

「そういえば、上官に呼び出されるのこつとも刑事だけ……す、す

みませんッ！…

「……だからやらせたんだけどな。だが、今回はお前個人で田立つちまた。」この先、鷹鮓に田をつけられたら厄介だ

「……

「奴はとにかく俺が気にくわねえだけだ。今俺と離れておけば」
「でも、そんなッ、刑事！」

平瀬が立ち上ると同時に、病室のスライドドアが静かに開く。
「あ、失礼。おとりこみ中みたいですが、傷の様子を見て構いませんか？」

担当の外科医、黒川は遠慮がちに入ってきて苦笑した。

「今日は、珍しくお見舞いのお客さんが多いですね。来島さん

「……多いつてほどじやねえが」

言葉を返しながら、田で平瀬に”座つて静かに待つてろ”と促す。
今度はおとなしく従つた。

話し合いはお預けだ。

「では、これで2人目ですかね。ここに来る途中、来島さんのお見舞いにいらっしゃった刑事さんを連れてきましたが……」

「……見舞い？」

心当たりがない。

メタボの警部なら昨日来てるし、他にそんな仲の同僚はないはずだが。

「どんな奴だ」

「えつ、と。すごく美人で

「女性なんですか！？」

俺より先に平瀬が食いついた。さつきまでの暗い面はどこに置いたのか、興奮したようにバタバタしている。

「刑事、もしかして……つな関係の方ですか？…？」

「どんな関係だ。空白で表現すんな」

「……や、やだなあ、照れなくつたつて。ハハ……やつぱり」

「なんでアンタは泣いてんだ、黒川医師。

「で、で、どんな人なんですか？……あと、大丈夫ですか？」

「ア、アハハ。背がスラッと高くて……そつか、恋人かあ、やつぱ

……」

「……」というより、俺を置いて盛り上がり始めやがった、コイツら。とりあえず、その来客の情報に耳を傾ける。

「外国人みたいでしたよ。」う、銀色の長髪で、目なんかアッショウで「」

……銀髪？

「”アッショウ”？」

「灰色の目のことですよ」

……その色素がそりつのは滅多にないが。

「物腰も柔らかで、優雅で、全身紅い服で……」

「ちょっと待て」

思わず口をはさんだ。

「女……だつたんだな」

「え、はい」

嫌な予感がする。頭に浮かぶのは、『一度と会いたくない知り合い』。

「…………トリゴン、と名乗ったか？」

「そして、元『仕事仲間』。」

「え、はい」

「今すぐ帰せ」

一瞬、いつそ傷が開こうがどうしようが、走って逃亡しようかと思案した。

そのくらい、最悪だ。

「えつ、刑事、帰せつて……」

ぼくが言いかけたとき、ふいにスライドドアが開いた。

「……呼ばれたような気がしたんだけど、入つてもよろしかつたかしら？」黒川センセイ

ハスキーな女性の声。振り返つておもわず、息を飲んだ。
確かに、ものすごい美人だ。

外国の映画の女優みたいに、彼女のいるまわりだけがスポットを浴びてキラキラして見える。全身が”紅い”という、病院にはあまりに似合わない格好も、似合ひすぎていてツッコむ気になれない。

「ハイツ、どうぞッ」

黒川医師が元気よく返事している。少し顔が赤い。なんか……なんで泣いてたのかわかった気がした。

ぼくも綺麗な人だなとは思うけど、身長差がありすぎてちょっと怖い。今は座つてゐるから、こいつ、正面に立つても背の高さがより大きく見えて

あれ？

「君が平瀬くん……かしら」

「うあいッ！？」

気づいたら、文字通り目と鼻の先に銀髪が揺れていた。反射的に身を引いたおかげで、椅子から転がり落ちてしまう。

か、かつて悪いぞ…… 刑事の前なのに。

「い、痛い……」

「あら、『じめんなさい』。……にしても、”うあい”なんてとつせじで出ないわよ？ 見込みがあるわね」

「は、はあ……？」

何の見込みだらう。笑顔に『まかされ』そうだけど、『気にな』。

「…………何の用だ、鳥声」

頭の上から刑事の声がする。

恐る恐る立ち上がりそちらを見ると、また半身を起こした刑事が、めちゃくちゃ不機嫌そうに鳥声さんを睨んでいた。

「……怖……田つきが普段の3倍怖い……ッ！」

女性なら泣いてしまふんじゃないかといつぱり向ひなび、鳥声さんは 楽しげに笑つてみせた。

「なアに殺氣だつてるの？ お見舞いに来ただけじゃない寄るな」

「逃げられないでしょ？ 傷が開いたら退院がのびるだけ。大人しくしなさい」

刑事のドスの効いた声に怯むことなく、刑事が怒つていてることすら、むしろ楽しんでいるようだ。

鳥声さんはそのままベットに近づいてこき。

「よおいしょっ」

「つて、おこー！」

刑事をまたぐよついで、ひらりと飛び乗つた。

「わ……」

「…………」

な、なんか見ちゃいけないもののよつた気がする。『氣まずくて』日を逸らすと、黒川医師が完全に石化していた。その間にも刑事と鳥声さんは。

「あら、ちよつと太つた？ 原さんのよつになるのも時間の問題か

しら

「なるかッ！ 腹を触るな！ ふざけるな降りろ！ ぐつ、傷に乗るな、殺すぞ……！」

「今、殺人予告の起訴口実として脳内保存するわ

「その気味の悪い喋り方もやめろ！ 虫ずが走るッ……！」

「騒がないの。退院させたくないんでしょ？ 聞いてるわ

やつぱり……喧嘩しますよね？ 恋人じゃないのかな。

それとも、ただの痴話喧嘩……？

「……私は、失礼します。しばらくしたら、また体調を見に来ますから……ハハ……」

ひきつった笑顔で会釈すると、黒川医師は出て行ってしまう。なんだか可哀相な人だ。

でも、この雰囲気の中に置いていかないで欲しかったです。

「ぼ、ぼくも失礼しますね！ それじゃ

「待ちなさい」

「…………はい」

出口に向かおうとしたところ、強いハスキー声に足を止めてしまつた。

「貴方にも関係ある話をするから、じつちにいらっしゃい」
静かだけど、何故か拘束力のようなを感じる喋り方。
ゆっくり振り返れば、鳥声さんはいつの間にかベットの端に座り直していた。刑事も不機嫌そうに座つて居る。

”謎の美人”と刑事の組み合はせは、ちょっと格好いい。

「ここに座つたら？」

「椅子に座れ、平瀬」

トリ「Hさんがあの隣を、刑事はさつきまでぼくが座つていた椅子をさす。

ぼくが迷わず椅子の方に座ると、鳥声さんはつまらなそうにため息をつく。

「まあ、いいわ。よつやく関係者だけになつたし、遊ぶのはいいまでこしましょ」

銀にぶちぢられた伏せがちな田が、まず正面の僕を、そして刑事をなぞつてゆく。刑事は黙つて見返す。

「……、現状を教えに来てあげたのよ。シモンの、ね

待つていた、名前。

それを聞いたときの刑事の表情は、僕には読めなかつた。それが少し悔しかつたけど、僕は黙つて鳥声さんの次の言葉を待つ。

予想外の何かが起きる、予感がしてた。

「まずはコレかしら」

鳥声はやういこいつ、手鞠から何かを取り出し、俺へと放る。

「…………」

無造作に足の上にまつ出されたのは、雑誌ほどの厚さの封筒だった。

「今は読まなくていいわ。もっとも、一人とも量くらには把握しておいてほしいけど」

「何だ」

「捜査資料のまとめ。ひとつにいりず、シモンに関係してゐる」

思わず布団にても確かに重みのあるそれを持ち上げ、改めてその量に驚く。

「つ、多いな」

何かしていふとは思つてゐたが、2週間でこゝまで膨れ上がるとは。

「彼女だけで起こした事件は少ないわよ。最近、その”シモン”つていうのは組織をつくつてゐると判明したから、メンバーの疑いがあるのを全部入れてきちゃつたら、そうなつたわけ」

「組織……規模は」

「せつかく作つたんだから資料を読みなさい」

「…………」

「とりあえず、”ムラサキ”的”モン”と書いて、組織名『紫門』。メンバーはどれも裏じや有名な犯罪者だけど、共通点がひとつ。おそらく全員、”未成年”だつてこと」

「えつ、ええツ！？」

叫び声をあげたのは平瀬だ。

「”未成年”つて、子供の犯罪者つてそんなにいるんですか！？」

「推測だけに、表沙汰になつてないのが多いけじね。アナタも”す
ごい蹴りの女の子”と交戦したでしょ？」

鳥声にワインクされ、平瀬はたじろいで口をつぐむ。顔がわずか
に赤いが、黒川医師といいコイツといい、反応がおかしくないか？
鳥声の何にそこまで気圧されてんだ。

顔か？

「まあ、そもそも未成年の範囲が広すぎるのよ。19、18なんて、
もう立派に大人でしょ？ ニュースで名前が出ないうちは、多少や
んちゃしていいとでも思つてゐるのかしら……”未成年”の若造・小
娘共は、搜すこっちの身にもなつてほしくものね」

大袈裟に肩をすくめると、鳥声は勢いよく立ち上がり、今度は俺
にワインクする。

「そう思うでしょ？ ………………スルーしないの、”しのぶ”
「名前で呼ぶなッ！」

反射的に全力で枕を投げつけるが、かるく身を反らして避けられ
た。体の鈍りを感じる。

だが、それ以上に鳥肌が立ちそうな悪寒を感じた。

「いいじゃない、忍。長い仲なんだから」

「だから呼ぶなッ、氣色悪い！」

「返事しない子が悪いのよ。それとも、昔みたいに愛称で呼びまし
ょうか？」この口リコン

「誰が口リコンだ！ それは悪態であつて愛称じゃねえだろ、この
コスプレ野郎……ッ」

「刑事”私服警察官”だもの。個人の似合つものを着て何が悪い
のかしら！？」

「開き直るなッ！ 調査および逮捕のための私服だろ、どにに紛れ
込む氣だ貴様は！」

「殴り飛ばすッ！」

「ほらほら”錢形くん”、安静に安静に

「誰のせいだと……クソッ」

「刑事、落ち着いてくださいっ！ 傷が開きますって！」

「引っ込んでる、平瀬ッ！！…………いや、ちょっと待て」

鳥声に殴りかかりかけた体を戻す。平瀬の介入でようやく、何かを忘れていることに気がついた。

「刑事……？」

「ん？ なあに、黙つて」

「……仕事の話は終わりなのか。貴様が喧嘩ふつてぐるつてことは「ええ、だいたいね。あとは退院した後でいいでしょ」

「それだ。……何故、”処分”について触れねえ。氣でも使っているつもりか」

「処分……あつ、そういうえばそつです！ 鷹鮑警視！」

平瀬も氣づいたらしく、おそるおそる鳥声をつかがつ。鳥声も、鷹鮑の名でようやくわかつたらし。

「処分……ねえ」

鳥声は俺達を見返しつつ、ニヤリと笑つた。

「特に聞いてないけど、人事異動ならあつたわ

「ど、どんな……」

「安心なさい、平瀬くん。二人とも同時かつ一緒に、

「…………『犯罪組織”紫門”捜査本部（仮）』に異動してもいいだけだから」

一瞬、何を言われたのかわからなかつた。

「…………」

つまりは。

排除でも謹慎でもなく、地方に飛ばされるわけでもない。しかも、シモンの捜査に、また来島刑事と一緒にあたれる、ところど、みたいだ。

「…………やつ、やつたああああつ！―― よかつたですね刑事つ！」

「！」

「平……ぐッ！？」

理解した瞬間、僕は感極まつて刑事のところに飛び込んでいた。「て、てめつ、腹のは完治してねえつて……」

「うあつ、『じめんなさいつ！』

慌てて離れると、ぼくの体当たりは見事に怪我に当たつてしまつたようで、刑事は脇腹を押さえて唸つていた。

大変だ、せつから退院した後も大丈夫つて一コースだつたのに、怪我がまた開いたら――！

「け、刑事、痛いですかつ！？ ナースコールしますかつ！――？」

「…………それ、より。立て」

「え？ はい」

言われたとおり刑事のかたわらに立つ。

でも次の瞬間、お腹にまつすぐ肘が飛んできて、またしゃがみこむ。

本当に、声が出ないくらい効いた。

「…………お、あいこ、ですか……」

「馬鹿が、足りねえくらいだ……ッ」

「…………軽いコントはもう終わつたかしら？」

ふと見上げると、鳥声さんはまたベットの端に座つていた。指先で長い髪をもてあそびながら、ぼく達をまじまじと見ている。確かに、一人そろつてお腹を抱え込んでいる姿は、ちょっとおも

しろいかもしない。ぼく自身は、刑事に申し訳ないと痛いので笑えないけど。

「……ふふつ、思ったより楽しそうじゃない。忍」

「ビニが、いや、ビニでもいいが、名前で呼ぶな……ツ」微笑む鳥声さんに、不機嫌そうに返す来島刑事。喧嘩しても、やつぱり何だか親しげだ。そういうえば、『長い仲』って言ってた気がする。

「だが、よく鷹鮓が許したな。』メタボ』が何か仕掛けたか……？」
「ああ、原さん？ 今回は違うわ。』鷹鮓警視よりちょっと偉い人

』からの口添えがあつたの」

「誰だ」

「ヒントは、『優秀かつ性格のいい警視』、そして、『私もまた、本部にお呼ばれしたこと』」

それを聞くと、刑事の田からよりよじやく緊張がほぐれ、今度はすぐ苦々しい表情になる。

「 カンナ 」、か

ぼくはといふと、また聞き慣れない名前が出てきて首を傾げていた。

「誰だらう？ あのヒントに当たる嵌まるような警視なんていったかな。怖い上司の顔しか出てこない。」

ぼくが一人でしゃがんだまま悩み混んでいると、すぐ正面を赤色がよぎって、ハツと顔を上げる。

「だいたい現状はわかつたでしょ？ 』お見舞い』の目的は果たしたから、そろそろ帰るわ」

いつのまに移動したのか、鳥声さんは扉の近くで振り向き、薄く笑つた。2度目だけ、まったく物音も気配も感じなかつた。あんなに長身の、目立つ人なのに。

「さつさと帰れ、馬鹿が」

フン、と鼻を鳴らした刑事が吐き捨て、鳥声さんから視線をそら

す。

二人の話は、これですべて終わりみたいだ。

「あ……あのつ、最後にひとつだけ聞いてもいいですか？」

「あら、何かしら。平瀬くん」

鳥声の微笑がぼくに向けられる。少し緊張しながら立ち上がり、ぼくは最初から抱いていた疑問を投げかけてみた。

「来島刑事とあなたは、その……恋人なんですか！？」

耳が痛いほど沈黙が走る。

「あ、あれ？」

慌てて一人を見比べると、刑事は額を押さえたままサイドテーブルに突っ伏し、鳥声さんはぽかんとしてぼくを見ていた。もしかして、聞いたらまづかつたのかな……今ちょうど修羅場とか……！？

「ふつ、は」

吹き出したのは、鳥声さんだった。

「わ、私と忍が、ね。これじゃ無理もないか……ふふつ、アハハハハツ」

鳥声さんは楽しげに声をあげて笑いながら、ふいに帽子を取る。「くくッ、いい気味ね、忍。嫌でたまらないでしょ、ふふふ……長い髪を素早く一つにまとめていく。それを呆然として見ながら、ぼくは不思議な感じを覚えていた。

鳥声さんの、声が。

だんだんと 深みを帯びたテノールへ変化していく。

「それにしても……つ、アハハハハツ！ 期待にそえなくて悪いけどね、平瀬くん」

乱暴に手の甲で口を擦ると、鳥声さんは尖った犬歯を見せて、野性的にニヤリと笑う。

赤い口紅は、手品みたいに綺麗に取れていた。

「オレ」は、来島 忍に興味はあっても、男にはないぜ？」

「じゃあな」、と。

彼女　否、”彼”は、銀髪を尾のよつこひるがえし、病室を出ていった。

「え、……え？」

「…………奴は、『鳥声　錦』は、まいりじとなき男だらうが。……

見て氣づかなかつたのか」

振り向くと、体制を元に戻した来島刑事が、いかにを娘めしげににらんでいる。

ぼくは、それでやつと氣がついた。
といつより、何で氣がつかなかつたんだらう。……一?

あの、”女性”から”男性”への豹変の前から、鳥声さんには『女性の体にあるべき凹凸』が、まつたくといつていいほど、無かつたのに。

とぼとぼと病院の廊下を、来島刑事の病室へと帰つていぐ。日もだいぶ傾いたし、そろそろ彼女も帰つたと思つ。

「…………ハア」

銀髪の髪の彼女を思い出すと、けよつと胸が痛い。やつぱり、患者と恋人だらうし。

ふと、前から革靴の、『シコシ』という音が響いてきてハツとした。長身、銀髪、アッシュ、奇しくも彼女と特徴が同じその男性は、赤みがかつた茶のスースの上着を小脇に抱えていた。目が合うと、男性は薄く笑みを浮かべて会釈する。

「おつかれさまです」

「あ、はい。……？」

なんだろう、この違和感。診察で患者から異常を見つけたときの
ような、意識にひつかかるような。

「……失礼ですが、どこかでお会いしましたか？」

「いいえ」

男性は即答した後、苦笑する。

「ああ、きっと妹と会ったのでしょうか。似ているもので」

「はあ……」

なるほど、兄妹か。なら、これだけ似ていてもいいかもしない。
第一、彼女はまじうことなき”女性”だし、この人はまじうこと
なき”男性”だ。

なら、何がおかしいんだろうか。

「きっと妹がこの迷惑をかけたのだわ。いづれ、お礼に行かせます
よ」

「えつ、いや！ 迷惑などでは」

焦りつつも、私は彼女がまた会いに来るという可能性にて、胸を踊
らせた。

足取りも軽い黒川医師と別れ、一人きり、白い廊下に立ち止まる。

「タチの悪いことね」

そう呟き、”鳥声”錦”は意地悪そうに微笑んだ。

反響した声は、”彼女”のものだったが。

セリフの一部を、

『ルパン三世』

作画・原作・原案

モンキー・パンチ

同作品映画

『カリオストロの城』

より、引用させていただきました。

episode 8 潤口機関・上（前書き）

現実の組織、人物などには全く関係ありません。

『犯罪者』サイドです。

静まり帰っていた部屋に、ぱたんと本を閉める音が響く。

「ふう……」

満足そうなため息をつくと、今や世界に警戒される”犯罪組織”をつくりあげた少女は、邪氣のない笑顔を浮かべた。

「嶋、おもしろかったよ！ ありがとう！」

笑顔で借りた本を差し出すけど、嶋はキーボードに指を走らせたまま、こっちを見てくれない。田はパソコンの画面に吸い込まれたままだ。

「…………」

私は本を抱えたまま、大きなオリーブ色のビーズクッショングから飛び降りる。最近のお気に入りだ。

ショード越しの陽光が差し込む、明るい、木張りの清潔な部屋。『芸術家』の友人が、体の弱い私を心配して作ってくれた。すごく居心地がいい。

冷たくて狭くてコンピュータばかりの、『玄庭』の部屋とは大違
いだ。

おかげで、クッションの上で口を浴びながら、本を読むのが習慣になってしまった。あっちこちに本が積んであるから、このクッシ
ョンを中心に”本の遺跡”が作られている。
散らかした犯人は私だけ。

「嶋あー？」

正面に回り込んでみても、嶋は気づかない。本の山の傍らで、ひ
たすらキーを打ち込んでいる。

ふと手の中の本を見て、思いついた。

「……ありがとう！」

「………… *ツ！？」

横から首に抱き着いてみると、嶋は「」しがびっくりするくらい飛びはねた。大きめのサングラスがズレて、見開いた青い目が現れる。口は大きな襟で見えないけど、きつてぽかんと開いてるはず。

「…………」

「…………」

嶋と私はしばらく向き合っていた。そのうち、嶋はため息をつくと、片手でキーボードに文字を打ち込んだ。

『頼むから もっと普通に気づかせてくれ』

画面に現れる嶋の言葉に、私は笑顔を向けてから、片手でキーを叩く。

『近づいても気づいてくれなかつたんだもの

本ありがとう

おもしろかつた』

『それはよかつた

ついにジャンルは恋愛小説にまでおよんだか

熱心なことだ』

『うん

これに書いてあつたお礼の仕方を実践してみた』

『それは恨めしい

心臓が止まりそうだつた』

嶋はまたため息をつく。わざわざから一言も喋らない。

といつより、喋れない。

なにより、何も聽こえない。

『まったく 己の醉狂な信者共が聞いたりじつするよ

『ごめんね』

割り込んで改行し、見上げるよつて嶋の顔を伺う。

『許してくれる?』

嶋はしばらくレンズ越しに私を見て、キーを打ちながらそっぽを向いた。

『己が、紫門を許さないはずがない』

嶋は私と、一番最初に”友達”になってくれた。

まだ、『玄庭』にいたころ、インターネットの中で、私が嶋を見つけて、コンタクトを取った。そのころは、『Isla^{イスラ}』って呼ばれてたけど。

『Isla』はネットの中で、いろんな悪いことをしても捕まらないことで有名だった。すごく難しいゲームを作つて、クリアした人としか話さない。

だから、そのゲームをクリアしてみた。やっぱり難しくて、まる1日はかかった。

そしたら、

『己は孤独だ』

『己は、”友達”なるものを探している』

英語のメールが届いた。

”Isla”は、スペイン語で、”島”。同じ年だといふことや、
聴覚がないこと。

何故か、”虐待”という言葉の意味も教えてくれた。

私には友達がどういうものかわからなかつたけど、蒼門に隠れて『Isla』とのメールを繰り返すうちに、思いついたことがあつた。

私や『Isla』みたいな子供は、まだたくさんいるはず。一人でなにもできないなら、たくさんで。

『己はここから逃げ出したい

『だが、行くところもない』

『Isla』のこのメールが、きつかけになつた。

『”日本”に来る気はない?』

『もつとたくさん”友達”を集めて、一緒に遊ぼう』

『大人が迷惑したつていいよ』

『私も、ここから逃げ出したい。できるなら、大嫌いな大人をこらしめてやりたんだ』

『”Isla”、君の協力が必要だよ』

『読み終わりしだい医務室にこいと 氷室^{ヒロ}が言つていた』

『りょうかい』

立ち上がるうつとして、その前にもう一度キーを叩く。嶋は首をかしげて画面を見る。

『日本に来てよかつた?』

嶋はしばらく、ジッと、それを見ていた。そして、うなづいてからキーを叩いた。

『お前たちに会えなければ 後悔しちだらう

このの湿気の多さは気に入らない』

照れ隠しなのか、嶋は遠回しな表現を使つ。しかも、パソコンを閉じてしまつた。もう行け、つてことだと想ひ。

『Isle』は、画面の中でだけおしゃべりだ。

医務室に着いたのはいいけど、私はまずびくするべきかな。

「ほんのチクッとするだけだつてんだろがッ！」
「やだやだやだ！ ずえーつたい、いやつ！－－」 はづ はこわい
－－つ！－－

「いだッ、おいッ！ 蹤んなやボケナス！」

「いじわるッ」

「意地悪で結構だッ」

「いたちゅうじつ！」

「そーそー、黒くて平らでな、甘くておいしい、プルチネも大好き
な……つてアホかッ！－－ 肌が黒いからか！？ 僕がつるべたじや
なかつたら逆にキモいわ！－－ 足より先にテメーのそつち修正して
やるうか！？」

「むあーつ、そつこつの、せくはり、つてこつんだぞ－－－－つ
てシマがいつてた」

「あんにゅうグラサン呑き割つてやるッ－－－－

診察台で暴れてるのは、プルチネ。ピンクの髪が動きにあわせて
ふわふわとなびく。でも、いつも星型チークのかわりに、大きな目
は涙をたたえている。

そして彼女に蹴られつつ、注射器を構えている白衣の少年こそが、
”氷室”。

「……楽しそうだね」

思わずぼそつとつぶやくと、氷室もプルチネも私に気づいたみたいだった。

「シモンちゃんだつ、わあいつ！ ねつ、きいてきて！ このまえすごいものみたよつ」

「あつ、ボケ！」

逃げるチャンスとばかりにプルチネが二つにジャンプする。

しかし。

「ふいぎゅッ」

そのまま、顔から床へ落ちる。私はびっくりして動けなかつたし、落ちたプルチネ自身もぽかんとしている。

「…………つバカかッ！ ガキのくせにあんだけ跳ねりや、足に反動つてもんがあるに決まつてるだろバカ！ 気づけよバカ！」

氷室がバカバカ言いながらプルチネを診察台にもどしている間に、よつやく気がついた。

「氷室……、すいへ日本語上手になつたね！ テレビの芸人みたいだ！」

「つっこむとこないじゃねえええええッ！…」

「心拍、血圧、栄養状態、これといって問題ないな。さすが俺」
氷室が聴診器などをかたづけながら、得意げに私を見る。
「このぶんなら、もう数年で肉体年齢も追いつくぜ」

「ふうん……」

氷室の向かいの椅子に座つたまま、自分の腕を見てみる。白くて細くて、何かを投げるだけで折れてしまいそうだ。頼りなさすぎる。理想としては、私もプルチネや和泉イズミみたいに、来島刑事たちと渡り合えるようになりたいな。

頭だけじゃ何もできないんだよね、結局。

……。

「紫門？ どうした？」

はつと顔をあげると、氷室に覗きこまれていた。プルチネからも心配そうに見られている。

「どうもしない。大丈夫」

「そうか？ なら良し！」

氷室はパンツと一つだけ手を叩き、今度はプルチネに何かを投げ渡した。

「むい？」

首を傾げて、プルチネが掴んだそれを指でつまむ。

「なあにこれ

「即効性の睡眠薬だ。寝てる間に治療してやつから、飲めねるの？ いたくともおきないの？」

「約束する」

「……」

不安そうな顔のプルチネが、私の方をチラリと見た。

「プルチネ、氷室は安全。私の友達だから」

「うんっ！」

とたんに”ピヒロ”はパッと笑顔になり、水もなしに薬を飲み込む。

「おやすみいっ」

元気に言つた次の瞬間には、こてん、と診察台で寝息をたてていた。氷室がすかさずその腕に注射を打つ。

「……ふう、これで1時間は何しても起きねーな」

「おつかれー」

「紫門の言つことはすぐ信用するよな」

氷室はため息をつき、苦笑いを浮かべた。

「……無理もないか、注射が怖くとも」

「そうだね、たくさん打たれたんだろうし。あ、蹴られたとこ大丈夫？」

「骨の1本も折つてねーよ。コイツ、すげく弱つてるな」

プルチネの額に手をポンとして、氷室は首を傾げる。

「言語能力の進歩のなさも”副作用”か？ コイツのキャラかもしれねーけど

「”キャラ”？」

聞き慣れない言葉に、今度は私が首を傾げる。

「”キャラ”って何？」

「は？」

「何かの名称？」

「…………いや、俺も日本は覚えたばつかだから。はははっ。や、それより

引き攣つた笑顔をうかべ、氷室はひきだしの中から一枚の紙を取り、何かを書き込み始める。私とプルチネの”経過”を書き込むんだ。

枠線もない白紙だけど、氷室はそれを”カルテ”と呼んでいる。

“つぼみ”からの報告で、日本警察はちやんと俺達の“搜索本部”を設置したそうだ

「えつ、ホントっー？」

「おう

それを聞いたとたん、私は一瞬で椅子から跳ね上がった。楽しいことを思いついたように、無条件でドキドキしていく。体があつたかくなつて、自然とほおが上がる。

“警察” 今の私を一番ワクワクさせてくれるのは、やつぱり

“警察”だ……！

「来島刑事も入つてるんだよね？」

「あ……、”紫門の好きな刑事”も入つてるって言つてた
「わあつ、さいこつ！－！ そろそろ遊びに行かなくちやつ。和泉
とつぼみが近いよね？」

はしゃぐ私を横目に見ながら、氷室はため息をつく。

「電波双子”出動か……その刑事に同情するぜ」

狭い部屋の中、歌声が響く。鈴のように涼やかで可愛らしい、妹の声。俺はその後ろで耳をすませている。

「チャンスは毎週一、ちゅーちゅーちゅーすでー、いつつの数字を選ぶだけーでー、火曜にチャレンジャーいつせんまんえーん

歌詞の内容ヒドいけど。

しかも明るい歌つぼみのに抑揚ないけど。

「……もなくていい一けどーー」

ついにメロディーも無くなつた。

歌いながら、妹 つぼみは、マーク式の紙を淡々と塗り潰している。なんでも、数字を選ぶだけの”宝くじ”らしい。

「……つぼみ、今いい？」

「仕事中」

「……遊びの話でも？」

つぼみが振り返る。俺とは180度違う、ぱっちりとした目が瞬きをした。

「遊びなら別」

「仕事中じやないのか？」

「適当でもできるし、もうちょいで終わる」

短い鉛筆を指で弾き飛ばし、回転椅子でぐるつとこちらを向く。たぶん、俺が拾いに行くことになるんだろう。

「で、何？」 紫門？

「ん、てゆーか嶋だけ。メール見る？」

「読んで」

「……『場所から言つても、最初に捜査が入るのは汝らだ。紫門は』何してんの！？」

田を離した隙に回転椅子で全力回転する妹に、思わず全力でつっこむ。

大声出すなんて俺らしきもない。

「まーわつてるー」

「いや、それは見てわかるよー。」

「つーづーけーてー」

「田、回らないのか？」

「…………『好きにしていい、とのことだ。健闘を祈つてやる』……ついて」

「ふうーん」

「ほみはピタッと回転を止め、立ち上がる。ちょっとふりついた。

「じゃ、『期待に応えますかー。…………つわあ、気持ち悪い』……なら、やらなきゃよかったのに

「やったかったの。気持ち悪い」

「言いたいだけらしい。

「しばりへキコモリだつたし、たまには外で暴れよ」

「暴れるの俺だけだけど」

「場所はさしづめ、『青少年たちの戦場』つて感じ？
制服とか久しごりすぎむな」

「戦闘モード」

「イヒツス、ママ」

ご意見、ダメだし、ご感想、
お待ちしています。

迷走中です(泣)

視点が突然変わります。
何度もすみません。

警察側視点で

〈side 来島〉 〈side 平瀬〉

となります。

暑い。熔けそうだ。

俺はにじむ汗を拭い、おおよそ2週間は行つていなかつた職場へと歩く。

もう7月に入つてゐる。都市特有の暑さと湿氣が、心なしか凶暴さを見せはじめたらしい。

退院から復帰への手続きは、意外なほど手早く済んだ。好都合といえばそうだが、ここにも例の”上司”が少なからず絡んでいるんだろう。

試しに新聞やインターネットなどの情報も集めてみたが、やはり、『玄庭』についての記事はさほど取り上げられていない。

無論、”シモン”の名前も一切掲示されていなかつた。

「あ～っ！ そつこに見えるのは”来島ちゃん”じゃないか！ まだ6時だよー、病み上がりなのに早いね」

「…………原さん、か」

「そんなにあからさまに、『げつ』て顔されると傷つくなあー」

幅の広い体を揺らし、俺の倍の汗をかきながら苦笑する。

職場にはすぐ着くとはいへ、誰かと並び歩いて通勤するのは好きじゃない。それは相手が平瀬でも、このメタボ上司でも同じことだ。

「あれ、来島ちゃんなんか瘦せちゃつた？」

「……アンタはさりに肥えたな」

「アイス食べまくったからネ。でもソレそのまま言つかなー、普通」

「…………暑い」

「え、スルー？ 上司を大切にしようよ、もつひょひと。君がいいな
い間、ダレが未成年事故とか整理したと思つてゐるのかな？」

「アンタじゃないことは確かだ。あと喋んな……暑苦しい」

警察署の、薄汚れた白い壁が視界に入った。

一重の自動ドアをくぐり、ある程度だがクーラーの効いた室内に入ると、少しは安心する。

「…………どうせ、またアンタの直轄なんだろ」

「ふう、あ、わかつた？ ホントは、ボスはもう一つ分偉い人だ
けどね」

『ボス』 物騒な響きの言葉にひつかかる。眉をしかめて原さんを見やると、ニヤニヤしながら俺を見ている。

「気になるみたいだね~」

「…………別に。そのウザい面をやめやが……やめてください」「ふつ
ふつふ。新しい上司は少し遅れるんだって。平瀬くんと一緒に、先
に分室に行くといいよ~」

「…………」

「じゃあ、僕はお仕事お仕事」

原さんはふくれた招き猫のよつな顔で笑うと、俺の肩を一度叩いて歩いていった。

メタボの割にじつかりした歩きの後ろ姿を見送った後、俺は携帯を開いた。

「…………ん？」

着信が、1、2 7件。

しかもその全てが、今から連絡しようとした奴だった。

「刑事、まだかな……」

僕は小さくつぶやいて、正面の通りを眺める。

朝5時40分。出勤には少し早すぎるけど、刑事の職場復帰が待ちきれなくて飛び出して来てしまった。

次々にやつてくる先輩方に挨拶しながら（不審そうに見られた……。）、密かにため息をついた。

先に集合場所に行つてみると、というわけにもいかない。

1人で行つて、もしその”カンナ警視”が待ち伏せしてたらどうしよう……。

刑事のお知り合いで、あの鷹鮑警視よりも偉い人なのだ。すごく恐い人かもしれないし、この前の単独行動を怒られてしまっかもしれない。

そんなときに刑事がいないのはとても心細い。

「……あれ？」

そういえば、”カンナ警視”って男性だろ？ 女性の名前でも、ありえるかもしれない。

女性といえば……鳥声さんはびっくりしたなあ。

自分のすぐ目の前で、たおやかな”女性”から鋭利な”男性”へと変貌をとげた、銀色の髪の美男子。それだけでも信じられないような人なのに。

そんな人とこれから一緒に仕事をするんだと思つと、ちょっと緊張するかもしない。

「あの、もし……」

「はい？」

突然の声に飛び上ると、小柄で上品そうなおばあちゃんが、申し訳なさそうに僕を見ていた。

「警官さん？ 道を尋ねてもいいかしらねえ」

「あ、はい、わかりました。どこへ行くんですか？」

「ええっと……あれは、何て言うのだったかしらねえ……、そうだ、郵便局だわ」

「それなら、この道をまっすぐ行って、あのラーメン屋さんの角を右に曲がって真っすぐ行くと大きい通りに入ります。そうしたら左に行つて、サークルKを越えたあたりにあるはずです」

「ええっと……ラーメン屋さんを左……」

「あ、右です」

「そうそう、右ね。……あと、なんだったかしり」

「え、えっと」

僕は腕時計に目を走らせる。刑事の出勤まで、まだ時間があります。

うだ。

大丈夫、帰つてこれる。本当は駐在さんとかのお仕事だけど、警察官として放つておくわけにはいかない。

「あの、よければ、僕が道案内します」

「あら、そう？ 助かるわ……ありがとうねえ」

「いえいえ。こっちです！」

間に合わなかつたああつ……

結局、そのおばあちゃんは、行きたい所が”郵便局”なのか”銀行”なのか”市役所”のかも曖昧だったみたいだ。

結局、なんとかして思い出してもひりひりて、おばあちゃんの歩みに合わせて連れていったのだけど。

6時……かなり過ぎちゃいました。

びひひひ……刑事なら、もつ着こてるかもしれない……！

とにかく急いで刑事の携帯にかけるけど、こりこりしながらない。7回であきらめてしまった。

と、とにかく急いで向かわないと……！

もう思つて、まだ人の少ない通りを走り出した。

何してんだ、アイツ。

とりあえず、一回は連絡を入れよつと履歴を開いた時だ。

チリン

不意に足元から響いた鈴の音に、反射的に目を落とす。

「……………猫？」

何の変哲もない、どこにでもいる二毛猫だ。青い首輪には鈴、そして、小さな金属の箱が引っかかっている。

「……………」

猫はともかく、箱が気になる。雑な溶接といい、わずかな機械音といい、怪しい。

確認しようと手を伸ばした、が。

「だあああああツ、いたぞツ」

突然のだみ声が響いた瞬間、怪しい猫は驚くほど素早く身をひるがえし、目の前の角へと消え去った。

「あつ、くそ、待てえツ！」

すぐに、凄まじい形相を作った5人の警官が、揃って追うよつに角を曲がっていく。

なんだつたんだ。

顔と制服を見るかぎり、確か交通課の奴らだつたと思つが……猫まで取り締まるつもりか？

「猫ー、ねーこー？」

「あの畜生め、何処だ……ツ」

「ミケちやーん！」

よく見ると署内のそこらかしこで、この”猫探し”は見つけられる。しかも、そいつらの所属には共通点が見つからなかつた。

「少しいいか」

「へ、俺ですか？」

声をかけると、一番近くで”ねーじゅらし”を振り回している若い警官が振り向き、俺を見るなり目を輝かせた。

「うわつ、来島刑事じゃないつスか！ 退院したんスね！」

思わず眉をひそめる。名乗った覚えどころか面識もないが、俺のことは知つてゐるらしい。

「あつ、スイマセン。いや、来島刑事と平瀬刑事、近頃ちょっと有名なんス。『玄庭』の件で”あの”鷹鮑サンを”ぎやふん”と言わせたつ一つことで！ いや、人気ないつスから、あの人

「……そつか」

へラへラと笑いながら聞きもしないことを喋り続ける。 ”あの”平瀬よりも、相当軽そうな奴だ。

この調子なら、簡単に聞き出せる。

「他の奴らも猫を搜してゐるらしいが、何があるのか。あの猫

「あ、猫つてか”箱”つスね。金属の」

「箱……危険物か」

「そういうや、刑事は何も知らないスもんね！ 最近けつこう騒がれてんスけど

「……」

間違つてはいない、が、”慇懃無礼”つてのはこういう奴のことかもしけれない。へラへラした態度がイラつかせてくれる。

鳥声よりは、マシか。

感情が表に出たのか、ソイツは俺の顔色をつかがうなり青くなつた。

「あれ、なんか、怒つてたりしてゐつスか……？」

「……説明しても、どうも」

「お、おッス！ あれ、実は

L

「『爆破テロ』……みたいなものかな。小規模の。そんな訳で、手伝つてほしいんだ」

白い猫。

……あれ、大丈夫？ 猫、ダメだつたのかな？」
ぽかんとしている僕に、彼はにこりと笑いかけてくる。

あ、あの

「…………どちらが、ですか？」

よしやくしほり出した質問も
どこか間抜けたものはないでしょ
うか。」

”その人”は、一瞬の間の後、勢いよく吹き出した。

ただの警察官だ

「見てのとおりですか……？」

僕は驚いて”那人”を見る。けど、警察手帳以外、それっぽいものが見当たらない。むしろ、お洒落なサラリーマンみたいだ。

身長はそんなに高くない。僕よりちょっと低いくらい。

ふわりとしたクセのある茶髪に、太めの肩。
優しそうな顔立ちだ
グレーのスーツもかつこよく着こなしている。

鳥声刑事くらい目立つ感じの人なのに、ぜんぜん署で見た覚えが

「あ、見えない？　よく言われるけどね」

「す、すみませんッ、失礼なことを……！」

「いいよ。で、最初に言つた”手伝つてほしいこと”なんだけど」
「そういうながら、”那人”は猫を離し、僕に笑いかける。

猫はあつという間に白い点になつて消えた。

「簡単なことでね？ 今からその犯人達のところに殴り込むから、
『どちらが先に手を出したか』”証言”してほしいんだ」

「は、はい。…………つて、”どこ”に”何を”つていました！
？」

物騒な言葉に危機感がつのる。優しそうな人だけど、何となく裏
がありそうな……ついていつたら無傷じやすまなさそうな……。

「”テロ実行犯の巣”に”殴り込み”つて言つたろ？ ジヤ、行こ
うか」

「つて、すでに腕ひつぱられてるうえに力強いッ！？」

「ちょつ……待つ、そういう手伝いなら他のつ、格闘が強い人のが
いいんじゃー？」

「大丈夫。君は喧嘩しなくていいし、おとなしくしてれば怪我はし
ないはずさ」

「怪我つ……なら余計、警察官の増援を連れていつた方がいいです
よ！ 一人なんて無茶ですつてッ！！」

「…………ふう、ん」

”那人”が歩きながら振り返る。その顔には、見た目からは意
外なほど不敵な笑みが浮かんでいた。

「面白い子と組んだね、彼」

「へ……？」

「心配せずに、僕が一回殴られたら、あとは目も耳もふさいでて」
それだけ言うと、どんどん歩いて行つてしまつ。

僕より一回り小さなはずの背中。なのに一瞬、刑事について行つ
てるような錯覚がした。

「なんでだろう

？」

いや、そんなことよつも……。

「け、刑事……、助けてください……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5714m/>

斑裂きと捕護滑動

2011年8月16日03時22分発行